

はか  
博 多 115

—— 博多遺跡群第156次調査報告 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第945集



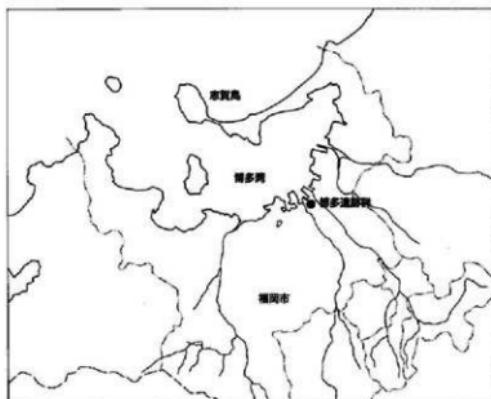
2007

福岡市教育委員会

はか た  
**博 多 115**

—— 博多遺跡群第156次調査報告 ——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第945集



調査番号 0551

遺跡略号 HKT-156

2007

福岡市教育委員会



# 序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、共同住宅の建設に先立って実施した博多遺跡群第156次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、古墳時代の初めから鎌倉時代にかけての堅穴住居跡や土壙などが発見されました。殊に古墳時代の堅穴住居跡は、博多湾における弥生時代から古墳時代にかけての集落域の拡がりを解明する上で貴重な資料となるものです。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、考古学や地域史の研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

---

## れいがん

---

1. 本書は、福岡市教育委員会が石田雅憲氏の共同住宅建設に先立って、2005（平成17）年11月22日～2006（平成18）年2月28日までに福岡市博多区祇園町313～316において発掘調査した博多遺跡群第156次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 道構は、堅穴住居跡をS C、土壙をS K、土壙墓をS R、石垣道構をS Q、井戸跡をS E、溝道構をS D、ピットをS Pと記号化して呼称し、その後にすべての道構を通番して001から始まる3桁のNo.を付した。また、道構No.の巻頭には、検出面を示す1～4の数字を付した4桁のNo.で表示した。
4. 本書に掲載した鉄器は道構を小林義彦が、遺物は小林と今村ひろ子のほかに鉄器は比佐陽一郎が作成した。
5. 本書に掲載した道構と遺物の製図は、小林と今村が作成した。
6. 本書に掲載した道構と遺物の写真は小林が撮影した。
7. 本書の執筆・編集は小林が行った。
8. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

## 本文目次

### 序

I.はじめに	1
1.発掘調査にいたるまで	1
2.発掘調査の組織	1
3.立地と歴史的環境	3
II.調査の記録	7
1.調査の概要	7
2.基本的順序	8
3.第1面の調査	9
1)土壙	9
2)井戸跡	16
3)その他の遺構	17
4.第2面の調査	18
1)土壙	19
2)土壤墓	29
3)井戸跡	29
4)その他の遺構	31
5.第3面の調査	31
1)土壙	33
2)石組遺構	37
3)溝遺構	37
6.第4面の調査	38
1)堅穴住居跡	40
2)土壙	47
7.包含層出土の遺物	53
III.おわりに	56

## 挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図(1/30,000)	2
Fig. 2	博多遺跡群調査区位置図	3
Fig. 3	博多遺跡群第156次調査区位置図(1/1,000)	5
Fig. 4	博多遺跡群第156次調査区周辺現況図(1/250)	6
Fig. 5	第1面遺構配置図(1/150)	7
Fig. 6	第1面西側全景(北より)	8
Fig. 7	1001号土壙実測図(1/30)	9
Fig. 8	1001号土壙(東より)	9
Fig. 9	1001号土壙出土遺物実測図(1/4)	9
Fig. 10	1003・1004・1006・1007号土壙実測図(1/30・1/60)	10

F i g. 1 1	1003号土壤出土遺物実測図(1/4) .....	10
F i g. 1 2	1013号土壤実測図(1/30) .....	10
F i g. 1 3	1013号土壤(東より) .....	10
F i g. 1 4	1020・1021号土壤実測図(1/30) .....	11
F i g. 1 5	1019~1021号土壤(北より) .....	11
F i g. 1 6	1037号土壤実測図(1/30) .....	11
F i g. 1 7	1038・1040号土壤実測図(1/30) .....	12
F i g. 1 8	1040号土壤(北より) .....	12
F i g. 1 9	1066・1067号土壤実測図(1/30) .....	12
F i g. 2 0	1072・1119・1155号土壤実測図(1/30) .....	13
F i g. 2 1	1067・1119号土壤出土遺物実測図(1/4) .....	13
F i g. 2 2	1131・1132・1152・1168号土壤実測図(1/30) .....	13
F i g. 2 3	1119・1131・1132・1155号土壤(東より) .....	14
F i g. 2 4	1169号土壤実測図(1/30) .....	14
F i g. 2 5	1169号土壤(南より) .....	14
F i g. 2 6	1169号土壤出土遺物実測図(1/4) .....	14
F i g. 2 7	1002号井戸跡(西より) .....	15
F i g. 2 8	1032号井戸跡土層断面(東より) .....	15
F i g. 2 9	井戸跡出土遺物実測図(1/4・1/3) .....	16
F i g. 3 0	1059号柱穴出土遺物実測図(1/4) .....	16
F i g. 3 1	第2面造構配図(1/150) .....	17
F i g. 3 2	第2面西侧全景(北より) .....	18
F i g. 3 3	第2面東側全景(北より) .....	18
F i g. 3 4	2001号土壤実測図(1/30) .....	18
F i g. 3 5	2001号土壤(西より) .....	18
F i g. 3 6	2003・2004・2052号土壤実測図(1/30) .....	19
F i g. 3 7	2001・2004・2052号土壤出土遺物実測図(1/4) .....	19
F i g. 3 8	2062・2063号土壤実測図(1/30) .....	20
F i g. 3 9	2062・2063号土壤(東より) .....	20
F i g. 4 0	2079・2093・2094号土壤実測図(1/30) .....	20
F i g. 4 1	2100・2124・2131・2135・2136号土壤実測図(1/30) .....	21
F i g. 4 2	2143号土壤実測図(1/30) .....	22
F i g. 4 3	2143号土壤(南東より) .....	22
F i g. 4 4	2143号土壤出土遺物実測図(1/4) .....	22
F i g. 4 5	2144号土壤実測図(1/40) .....	23
F i g. 4 6	2144号土壤(北より) .....	23
F i g. 4 7	2145号土壤実測図(1/30) .....	23
F i g. 4 8	2145~2147号土壤実測図(1/30) .....	24
F i g. 4 9	2145~2147号土壤(南より) .....	24
F i g. 5 0	2158・2186号土壤実測図(1/30) .....	24
F i g. 5 1	2195・2196号土壤実測図(1/30) .....	25
F i g. 5 2	2195・2196号土壤(東より) .....	25

F i g . 5 3	2217号土壤実測図 (1/30) .....	25
F i g . 5 4	2217号土壤 (南より) .....	26
F i g . 5 5	2226号土壤実測図 (1/30) .....	26
F i g . 5 6	2226号土壤 (南より) .....	26
F i g . 5 7	2195・2205・2215・2217・2240号土壤出土遺物実測図 (1/4) .....	27
F i g . 5 8	2004・2131・2147・2182号土壤出土遺物実測図 (1/3) .....	27
F i g . 5 9	2250号土壤墓実測図 (1/30) .....	27
F i g . 6 0	2250号土壤墓 (南より) .....	27
F i g . 6 1	2139・2141号井戸跡 (北より) .....	28
F i g . 6 2	2141号井戸跡土層断面 (南より) .....	28
F i g . 6 3	井戸跡出土遺物実測図 (1/4) .....	29
F i g . 6 4	2099号柱穴出土遺物実測図 (1/4) .....	29
F i g . 6 5	第3面遺構配置図 (1/150) .....	30
F i g . 6 6	第3面西側全景 (北より) .....	30
F i g . 6 7	3001号土壤実測図 (1/30) .....	31
F i g . 6 8	3002号土壤実測図 (1/30) .....	31
F i g . 6 9	3002号土壤出土遺物実測図 (1/4) .....	31
F i g . 7 0	3002号土壤 (南より) .....	32
F i g . 7 1	3002号土壤断面 (南より) .....	32
F i g . 7 2	3041・3045・3053号土壤実測図 (1/30) .....	33
F i g . 7 3	3067号土壤実測図 (1/30) .....	34
F i g . 7 4	3067号土壤 (東より) .....	34
F i g . 7 5	3074号土壤実測図 (1/30) .....	35
F i g . 7 6	3076号石組遺構実測図 (1/30) .....	35
F i g . 7 7	3076号石組遺構 (北より) .....	36
F i g . 7 8	3076号石組遺構 (東より) .....	36
F i g . 7 9	3021・3030号溝遺構断面図 (1/20) .....	37
F i g . 8 0	3002号土壤・3030号溝出土遺物実測図 (1/3) .....	37
F i g . 8 1	第4面遺構配置図 (1/150) .....	38
F i g . 8 2	第4面西側全景 (北より) .....	39
F i g . 8 3	第4面東側全景 (北より) .....	39
F i g . 8 4	4022号住居跡実測図 (1/60) .....	40
F i g . 8 5	4022号住居跡 (西より) .....	41
F i g . 8 6	4022号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3) .....	41
F i g . 8 7	4023号住居跡実測図 (1/60) .....	42
F i g . 8 8	4023号住居跡 (西より) .....	42
F i g . 8 9	4023号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3) .....	43
F i g . 9 0	4043・4044・4049号住居跡実測図 (1/60) .....	44
F i g . 9 1	4043・4044・4049号住居跡全景 (北より) .....	45
F i g . 9 2	4043号住居跡 (南より) .....	45
F i g . 9 3	4049号住居跡 (北より) .....	45
F i g . 9 4	4043・4044・4049号住居跡出土遺物実測図 (1/4) .....	46

F i g. 9 5	4002号土壤実測図 (1/30) .....	47
F i g. 9 6	4002号土壤 (南より) .....	47
F i g. 9 7	4003号土壤実測図 (1/30) .....	48
F i g. 9 8	4003号土壤 (南より) .....	48
F i g. 9 9	4003号土壤出土遺物実測図 (1/4・1/3) .....	49
F i g. 1 0 0	4018号土壤実測図 (1/30) .....	49
F i g. 1 0 1	4030・4031号土壤出土遺物実測図 (1/4) .....	49
F i g. 1 0 2	4033号土壤実測図 (1/30) .....	50
F i g. 1 0 3	4033号土壤 (東より) .....	50
F i g. 1 0 4	4033・4034号土壤 (西より) .....	51
F i g. 1 0 5	4036・4039号土壤実測図 (1/30) .....	51
F i g. 1 0 6	4042号土壤実測図 (1/30) .....	52
F i g. 1 0 7	4042号土壤 (西より) .....	52
F i g. 1 0 8	4054号土壤実測図 (1/60) .....	53
F i g. 1 0 9	4059号土壤実測図 (1/30) .....	53
F i g. 1 1 0	4059・4069号土壤 (北より) .....	54
F i g. 1 1 1	4069号土壤実測図 (1/30) .....	54
F i g. 1 1 2	銅錢拓影 (2/3) .....	54
F i g. 1 1 3	包含層出土遺物実測図 1 (1/4・1/3) .....	55
F i g. 1 1 4	包含層出土遺物実測図 2 (1/4) .....	56
F i g. 1 1 5	包含層出土遺物実測図 3 (1/4・1/3) .....	57
F i g. 1 1 6	出土土鍵 1 (縮尺不同) .....	61
F i g. 1 1 7	出土土鍵 2 (縮尺不同) .....	62
F i g. 1 1 8	出土土鍵 3 (縮尺不同) .....	63
F i g. 1 1 9	出土土鍵 4 (縮尺不同) .....	64
F i g. 1 2 0	出土土鍵 5 (縮尺不同) .....	65
F i g. 1 2 1	出土遺物 1 (縮尺不同) .....	66
F i g. 1 2 2	出土遺物 2 (縮尺不同) .....	67
F i g. 1 2 3	出土遺物 3 (縮尺不同) .....	68
F i g. 1 2 4	出土遺物 4 (縮尺不同) .....	69
F i g. 1 2 5	出土遺物 5 (縮尺不同) .....	70
F i g. 1 2 6	出土遺物 6 (縮尺不同) .....	71

## 表 目 次

T a b. 1	土鍵計測表 1 .....	58
T a b. 2	土鍵計測表 2 .....	59
T a b. 3	土鍵計測表 3 .....	60
T a b. 4	福岡市内出土皇朝十二錢一覧 .....	72

# I. はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

古代の昔から貿易都市として栄えた「博多」は、弥生時代より大陸文化の受け入れ口として長い歴史をもち、その町並みの下には幾層にも重なり合ったさまざまな遺構が眠っている。21世紀の今日、メイン道路に面した博多の町には大規模な商業施設やオフィスなどの高層ビルが建ち並んでいる。都市空間の有効活用を図った高層ビル化の傾向は、路地に面した旧市街地にも及んでいる。博多の町を東西に延びる国体道路と南北に延びる大博通りに面した祇園町界隈も例外ではなく、共同住宅の高層化が進み古い博多の家並みはビルの谷間に埋没しつつある。

2005（平成17）年6月24日、石田雅憲氏より店舗付共同住宅の建設に先立って、埋蔵文化財の事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された。この地は博多遺跡群の南西部に位置し、北隣のホテル建設時には発掘調査（第50次調査）が実施されており、当該地にも遺構や遺物が濃密に分布していることが予想された。このため、同年10月6日に試掘調査を実施した結果、地表下1.3m～2.5mに遺物包含層があり、この間に4面の遺構面が確認された。この店舗付共同住宅の建設は、既に施工業者に発注され、竣工日程も決定されていることから早急な発掘調査が必要となった。

はじめに、建物の基礎杭打設と周辺の土留め工事が先行して行われた。その終了を待って2005（平成17）年11月22日より発掘調査を開始した。調査区周囲の矢板工事は、建物の深さに応じて鋼板と木矢板が併用され、また打設に際して調査区側が大きく掻き乱されていたため、その除去に多くの時間と労力を要した。また、調査は、排土を調査区の東側に仮置きして西側を4面に調査した後、東側を反転して調査した。この間、施工にあたった株式会社占部建設の方々には二度にわたり排土を搬出していただき、調査の進捗に協力していただいた。この冬は寒さが一段と厳しく12月と2月は雨の多い年であったが、占部建設の工事関係者諸氏の多大な協力とご理解を得て2月28日に無事終了した。ここに記して謝意を表します。また、寒風や降雨下での発掘作業に従事した方々の労苦にも改めて感謝します。

## 2. 発掘調査の組織

調査委託 石田雅憲

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第1課（前埋蔵文化財課）

文化財部長 山崎純男

埋蔵文化財第1課長 山口讓治（前埋蔵文化財課長）

埋蔵文化財第1課調査係長 山崎龍雄 池崎譲二（前埋蔵文化財課調査第2係長）

調査庶務 文化財管理課 横本芳治 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財第1課 小林義彦

調査・ 整理作業 石川洋子 石橋陽子 今村ひろ子 大瀬良清子 熊本交伸 坂本ハッ子 鳥ヒサ子

田中ヨミ子 為房紋子 塚本よし子 土斐崎孝子 永野麻子 西田文子 野田淳一

播磨千恵子 播磨博子 北條コズ江 福田操 藤井羊子 三栗野明美 持丸玲子

矢川みどり 山口慶子 山崎光一 森田祐子 吉川貴久 萬スミヨ

発掘調査にあたっては、山口讓治、大庭康時、常松幹雄、比佐陽一郎、片多雅樹氏には懇切な指導と助言を受けた。協力に感謝申し上げるとともに本報告に十分に生かせなかつたことを深くお詫びする次第である。



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/30,000)

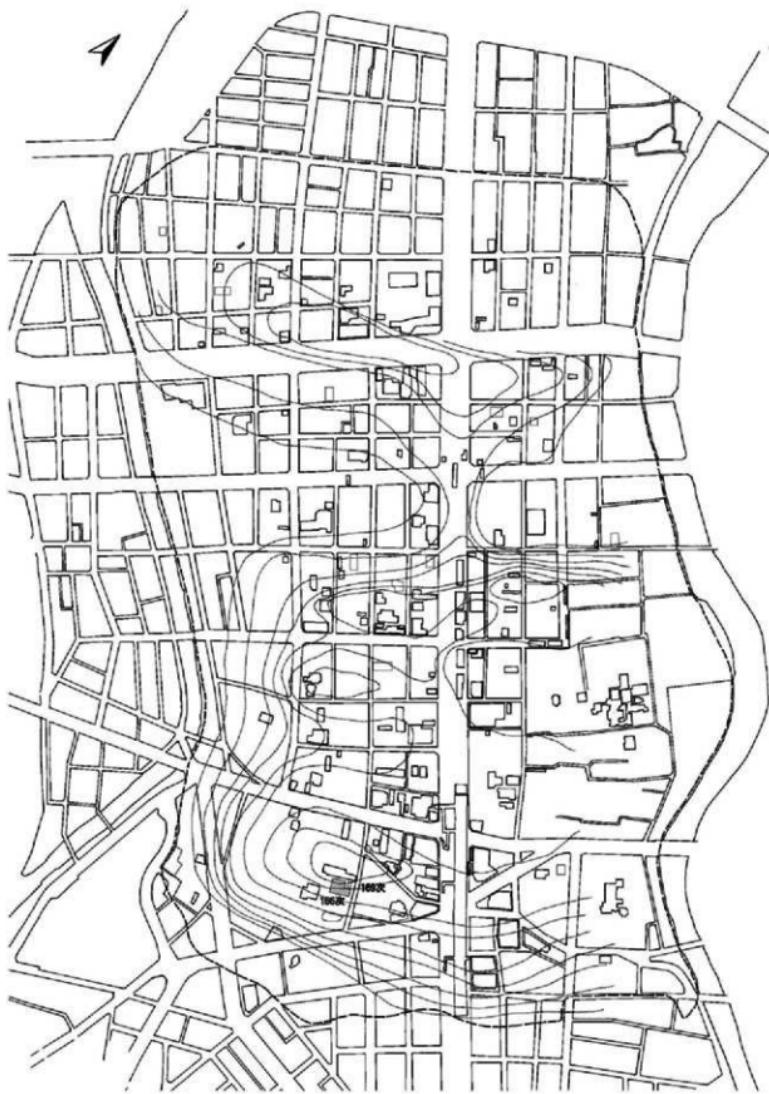


Fig. 2 博多遺跡群調査区位置図

### 3. 立地と歴史的環境

博多湾にむかって開口する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれた沖積平野である。この福岡平野には、御笠川と那珂川の二筋の大きな流れが河口を接して博多湾に注いでいる。博多遺跡群は、この二つの河川に挟まれた博多湾岸沿いの古砂丘上に立地し、南は旧比恵川によって画される。

この博多湾に面した東西400m、南北1,000mの古砂丘上に占地する博多遺跡群は、弥生時代から古代、中世を経て近世まで連続とつづく大複合遺跡である。殊に、古代には中国や朝鮮半島からの陶磁器類の輸入窓口として、また中世には泉州堺と並ぶ貿易都市として繁栄を極めたところである。この博多遺跡群の発掘調査は、1977（昭和52）年の高速鉄道祇園町工区の調査に始まり、これまで200地点に及ぶ発掘調査が行われ、二千年余に及ぶ歴史の全貌が次第に明らかになりつつある。

博多遺跡群を概観すると、その初見は弥生時代前期後半に遡る。はじめに祇園町交差点を中心とする古砂丘上に住居跡群や壙棺墓群が営まれる。ここは博多遺跡群を構成する二つの古砂丘のうち、陸側の「博多濱」のほぼ中央部で、古砂丘の最高所にあたり、中期から後期には東から南の後背地に向かって大きく拡がっていく。

次の古墳時代になると、砂丘の前進に伴って北の上呉服町周辺まで拡がっていくが、遺跡の中心はまだ「博多濱」の最高所にあり、竪穴住居跡や方形周溝墓などが調査されている。また、古砂丘東側の第28次調査区では、墳丘長が56mを超える5世紀初頭に造営された前方後円墳の「博多1号墳」が確認されており、那珂川右岸に展開する前方後円墳群の一翼として位置づけられる。

更に、「那の津」の官家が設置された536（宣化1）年以降、古代になると博多遺跡群は対外貿易の拠点としての性格を強め、遺跡は「博多濱」全域に亘って拡がっていく。688（朱雀3）年に初見する「筑紫館」、842（承和9）年以降に現れる「大宰府鴻臚館」は、博多遺跡群から入り海ひとつを隔てた丘陵上に位置している。博多遺跡群に官衙が置かれた記録はないが、鴻臚館式瓦や老司式瓦、皇朝十二銭、円面鏡、石帶、墨書須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器の外に越州窯系青磁、長沙窯系陶器などの多種多量の輸入陶磁器が出土し、官衙的色彩の濃い施設の存在を想起させるとともに貿易都市としての性格を強めていったものと思われる。一方、909（延喜9）年の遣唐使の廃止は、私貿易の隆盛を促すこととなり、古代末からは対宋貿易の中心地となる。発掘調査で検出される遺構や遺物の多くは、11世紀後半から13世紀前半のものであり、夥しい量の輸入陶磁器が出土するのもこの時期である。また、11世紀後半には「博多濱」北限の潟が砂州状に埋め立てられ、吳服町交差点付近で北の「息の濱」と繋がる。

鎌倉時代には、「息の濱」の開発が進み、「博多濱」と一体化して都市「博多」を形成する。13世紀後半から14世紀初めには砂丘上に幾筋もの道路が開削され、室町時代を通して供用されるが相互間の規則性や統一性は有していない。しかしながら、これらが中世後半期における都市「博多」の町並みの概観を示しているといえよう。一方で、「元寇の役」の後には鎮西探題府が置かれ、対外貿易都市としての機能のみならず西国への政治的中心地としての側面も備えてくる。

室町時代には、「息の濱」が一層の発展を遂げ、博多の都市機能の中心は内陸側の「博多濱」から海側の「息の濱」へと移る。息の濱の商人たちは、朝鮮半島や中国大陆のみならず、遠く東南アジアにまで進出していく。このことはベトナムやタイ製の陶磁器の出土によって裏付けられる。また、博多にも和寇の記録があり、海賊である和寇によって民間貿易が担われていた側面も窺える。一方、政治的には足利幕府によって九州探題が置かれたが、南朝方の反幕的勢力が強く、その政治力や軍事力

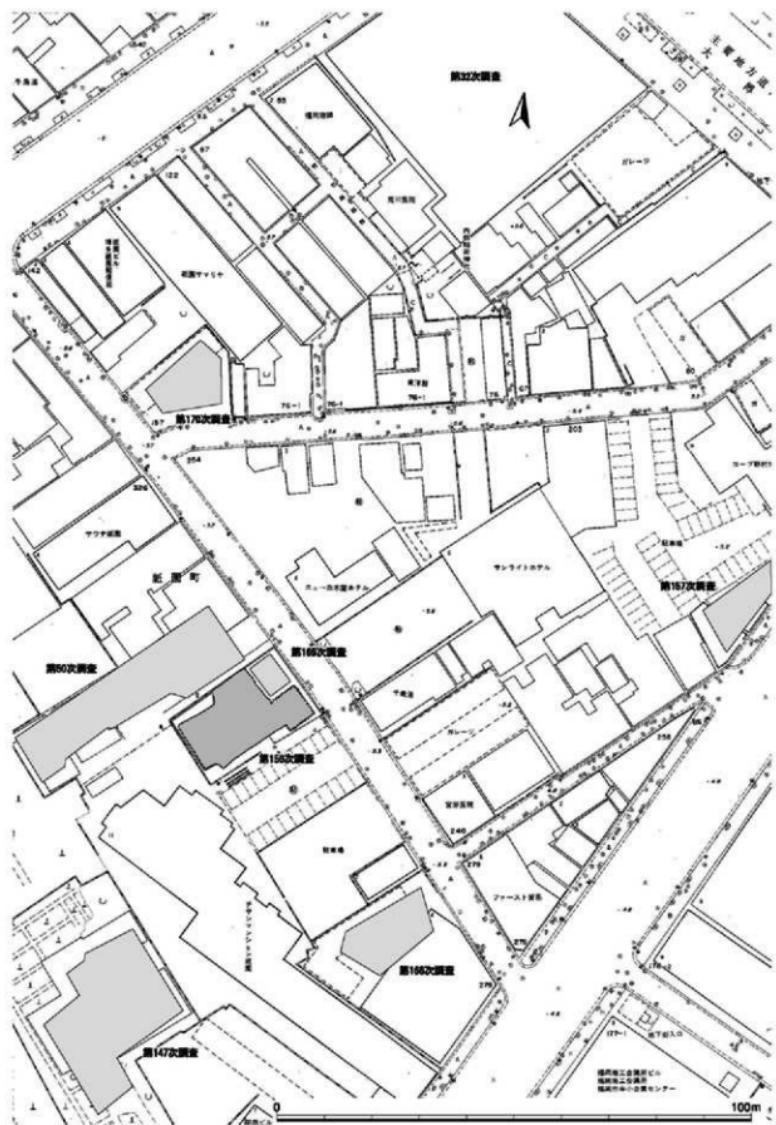


Fig. 3 博多遺跡群第156次調査区位置図 (1/1,000)

は強大なものとはなり得なかった。

第156次調査区のある祇園町界隈は、「博多濱」の中央部に位置し、これまでに25地点で発掘調査が実施されている。本調査区の北東150mにある第32次調査区では、弥生時代中期初頭の甕棺墓群が、また西へ50mの第147次調査区では前期末の甕棺墓群が営まれており、「博多濱」の最高所を取り巻いて墓域が拡がっているものと考えられる。次の古墳時代前期には、この祇園町を中心にして多くの竪穴住居跡が発見され、集落域が「博多濱」の最高所を中心にして拡がっていた。しかし後期にはやや稀薄になるが奈良時代になると再び集落域が濃密に拡がり、第33・45・50・59次調査区などで竪穴住居跡が検出されている。集落域は、古墳時代前期よりも拡大し、砂丘の谷部にも居住域は拡がっている。その後、平安時代後期（11世紀後半）～鎌倉時代（13世紀後半）には「博多」の街が北へむかって延びていくとは言いながら都市の中核が、依然としてこの「博多濱」を中心にして拡がっているために各調査区でこの期の遺構や遺物が重層的に濃密に拡がっている。すぐ北に面して調査された第50次調査や西方の第147次調査および南に位置している第157・165・169次調査の成果もこれを証左している。

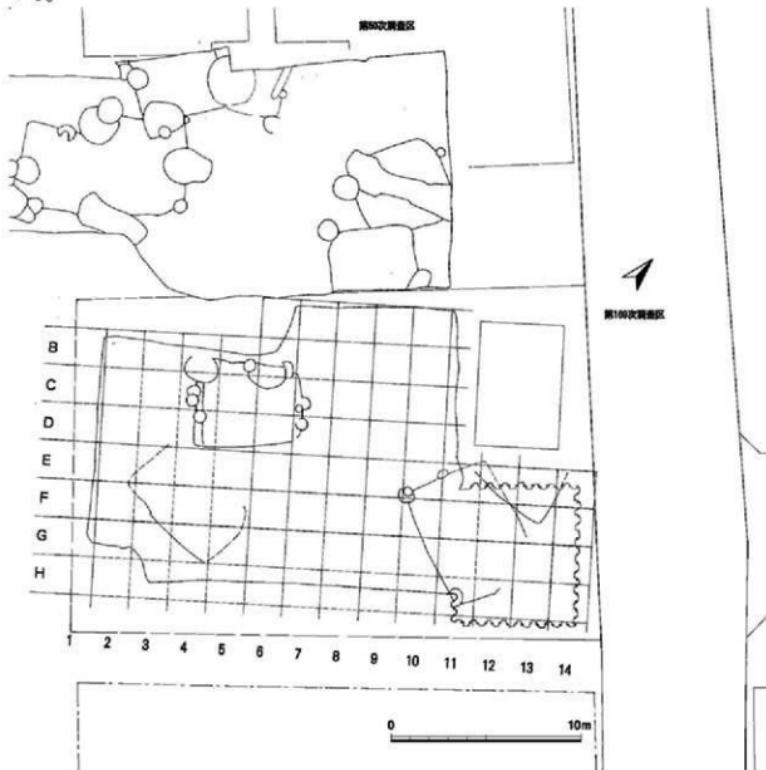


Fig. 4 博多遺跡群第156次調査区周辺現況図 (1/250)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

第156次調査区は、博多遺跡群を形成するふたつの古砂丘のうち陸側にある博多濱の南部に位置する。ここは古砂丘が遺跡群の南縁を西す旧比恵川（後の房州掘）にむかって緩やかに傾斜をはじめる南辺に立地している。

博多遺跡群は、弥生時代から中・近世までの長きにわたって人々がその営みを刻み込んできた大複合遺跡で、基盤層の黄白色砂層までの間には1~5mにもおよぶ遺物包含層が堆積している。この遺物包含層には幾面もの生活面（遺構面）が重層的にあるが、基盤層上に堆積した茶褐色砂層を除いて堆積土壤の変化は明確ではない。仮に良好な整地層が確認されても面的な拡がりとしてはほとんど捉えがたいのが現実で、厳密に单一時期の遺構面を検出することは不可能である。近代の搅乱層を取り除くと稀に近世の遺構面があるが、中世の遺構面が検出されるのが一般的である。このため発掘調査では、はじめに搅乱層を取り除いた上で安定した面まで恣意的に掘り下げて遺構面を調査した。その後、さらに包含層を掘り下げて下層の安定した遺構面を検出すると云う方法をとった。第156次調査区では4面の遺構面を検出し、上層から第1面、第2面とし黄白色の基盤砂層上に掘り込まれた遺構面を第4面とした。一方、この4面の遺構面に挟まれた遺物包含層は上からⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層とした。このうちⅢ層は弥生時代～奈良時代の遺物を含む厚い層で、この中から掘り込まれた遺構も見受けられたが確実なものは把握できなかった。また、各面の遺構の時期は、属する遺構面の年代に必ずしも対応するものではない。

このような条件下で発掘調査は、調査の進行に伴って出る拂土の仮置き場を確保するため調査区を東西に二分し、西側の2/3ほど区域からはじめた。しかし、調査に先立って行われた建物の基礎杭打設と周辺の土留め

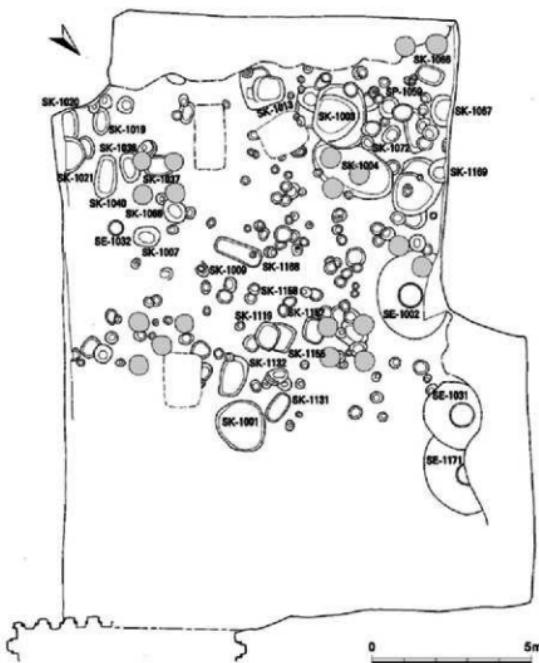


Fig. 5 第1面遺構配置図 (1/150)

工事に際して調査区内側が大きく搔き乱されており、遺構の一部が消失していた。そのため搅乱層の除去や遺物包含層の掘り下げは人の手で行うために多くの時間と労力を要した。また、調査開始早々の12月と2月は天候の不順な日が多く調査の進捗を妨げ、西側の4面の調査が終了したのは2月初旬であった。そのため東側の調査区については基盤層の第4面の調査を優先するために第1面は詳細な調査を割愛して2面まで掘り込まれた遺構のみを確認した。第3面の遺構も同様に観察記録に留めるのみで詳細は割愛した。天候と時間の制約を受けたとは云え自實に耐えぬ調査となった。

発掘調査の結果、古墳時代から中世まで4面の遺構面を確認した。第1面～3面は古代末から中世初めの時期で、井戸跡や土壙のほかに頭骨の残る土壙墓を検出した。また、第4面は基盤層に掘り込まれた古墳時代初めの竪穴住居跡を確認した。このうち1棟は覆土が大きく異なると共に弥生時代後期の遺物も混在していることから若干遡る可能性を含んでいる。

## 2. 基本的層序

第156次調査区は、博多遺跡群を形成する陸側の古砂丘上に立地しており、砂丘上面の風成砂層の淡黄色砂を基盤層（地山面）としている。この黄白色砂層上に幾層も的人工的堆積層（遺物包含層）が厚く積もり、その中に弥生時代以降の各時代の生活面が掘り込まれている。標高3.4mの基盤層の上面には淡黃灰色層が薄く堆積している。この砂層には網目状の層理が観察され、風成砂であることを物語っている。この淡黃灰色層の上に弥生時代中期から奈良時代の土器片を包蔵する茶褐色砂層が30cmほどの厚さで堆積している。層中には石室状に大きめの角礫を組んだ遺構があり、面的な拡がりが考えられる。さらにその上面に灰茶～暗褐色砂土層が堆積している。この層は若干の変化を示しながら標高4.0mまで続いている。この間に3面の遺構面が検出されるが、その時空的長さから考えると、さらに幾層かの遺構面が想起されるが現状では明らかにできなかった。この最上層の遺構面から現地表面までは約130cmの厚さで瓦礫層が堆積している。



Fig. 6 第1面西側全景（北より）

### 3. 第1面の調査

第1面は、地表下約130cmの標高4.3~4.5mで検出した造構面である。調査区の北側には10~12枚の平瓦を円形に巻いて井戸側とした近世以降の井戸跡が重なり合って掘り込まれていた。この井戸跡は基盤層となる黄白色砂一層下まで掘り込んで多くの造構を破壊しているために青白磁や土師皿のほか近世陶磁器を含む多様な遺物が混入していた。

第1面では、井戸跡5基と土壤26基のはかに多数の柱穴を検出した。井戸跡は近世以降のものがほとんどであるが、1基は井戸側に桶型(?)を用いていた。土壤は、方形～橢円形プランのものが多くを占め、長方形プランかそれに近いものの中には墓墳を想起させるものもあるが確証はない。一方、浅い不整形プランのものの中には、覆土中には炭片や焼土粒が含まれていた。また、柱穴の中には扁平な円錐を敷いたものも幾つかあるが、建物跡としてはまとまらなかった。

#### 1) 土 壤 (SK)

土壤は26基を検出した。調査区東側の約100mについては、調査を割愛して第2面と同時に行つたため正確な数は把握していないが、全体で35~40基があったと思われる。プラン的には、方形～長方形のものと円形～橢円形プランのものとに大別されるが、その差異が意味するところは明らかではない。また、橢円形プランとしたもののうち、不整形なもの(SK-1162・1163)の覆土には炭片や焼土粒が混入していたが、その要因は判然としない。分布的には、プラン等による特定の拡がりではなく、ランダムに拡がっているものと思われる。これは大小の調査区単位で捉えられることではなく、博多濱の全域を通じ時期的な検討をも加味して考える必要がある。

#### 1号土壤 SK-1001 (Fig. 7・8・9・116)

1号土壤は調査区中央部の東よりに位置するやや大型の土壤で、すぐ西には1131号土壤と1132号土壤がある。平面形は、長軸が165cm、短軸が149cmの東側がやや尖った橢円形プランを呈する。深さが32cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形をなす。底盤は平坦である。東壁の検出面に沿って6枚の土師皿が並んで検出された。

1~8は土師器小皿。口径は1が8.4cmのほかは9.1~9.8cm

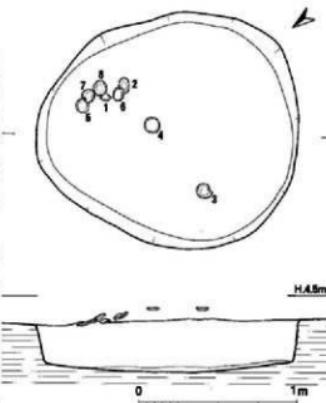


Fig. 7 1001号土壤実測図 (1/30)

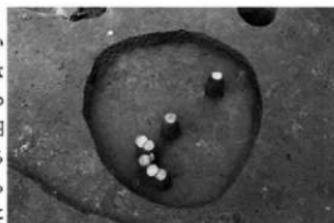


Fig. 8 1001号土壤 (東より)

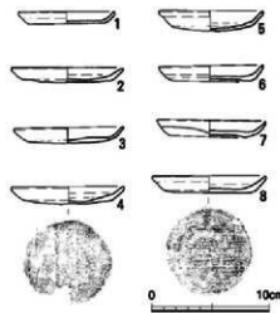


Fig. 9 1001号土壤出土遺物実測図 (1/4)

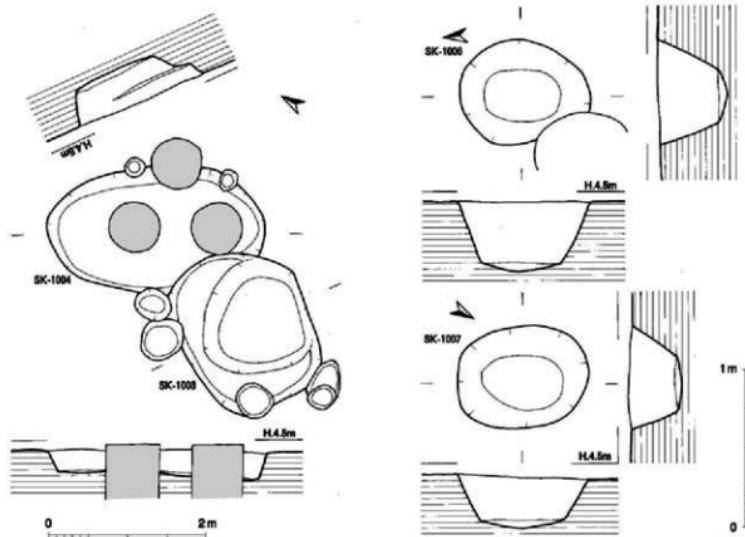


Fig. 10 1003・1004・1006・1007号土壌実測図 (1/30・1/60)

で、器高は1.1～1.9cm。底面は平坦なもの（1・3・8）、上げ底のもの（2・6・7）と外湾するもの（4・5）があり、1・3は糸切り、2・6・7は糸切り後に板目痕、5はヘラ切り後に板目痕、4・8は板目痕が残る。また3には油煙が残り、灯明皿に転用か。

## 1003号土壌 SK-1003 (Fig. 10・11)

調査区の北西部に位置する土壌で、平面形は長辺が204cm、

短辺が160cmの楕円形プランをなす。土壌ははじめに20cm以上上の深さで掘った後、東壁に沿って南北が150cm、東西が140

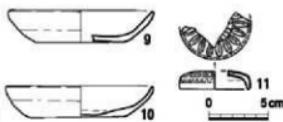


Fig. 11 1003号土壌出土遺物実測図 (1/4)

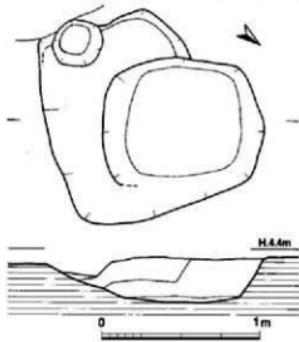


Fig. 12 1013号土壌実測図 (1/30)



Fig. 13 1013号土壌 (東より)

cmの円形に掘り込んだ2段掘りの構造をなす。壁面はやや急峻で、壇底は浅い凹レンズ状。北壁は1004号土壌を切る。

9・10は土師器環。体部は内窓気味に立ち上がる。9は口径12.4cmで、糸切り後に板目圧痕。10は口径12.8cm、底径7cmで糸切り。器高は2.7cm。11は口径6cm、器高が1.5cmの青白磁の合子蓋で天井部には印花文がある。13C後半～14C前半。

#### 1004号土壌 SK-1004 (Fig. 10)

調査区の北西部にある大型の土壌で、南西壁は1003号土壌に切られている。平面形は長辺が275cm、短辺が165cmの楕円形プランをなす。壁面は急峻に立ち上がり、壁高は35cm余。南にむかって緩やかに傾斜する壇底は平坦で断面形は舟形。

#### 1006号土壌 SK-1006 (Fig. 10)

調査区南部の1032号井戸上に掘り込まれた小土壌で、すぐ東に1007号土壌がある。平面形は長辺が83cm、短辺が53cmの楕円形プラン。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は45cm。断面形は舟底状。

#### 1007号土壌 SK-1007 (Fig. 10)

1007号土壌は調査区の南部に位置する小土壌で、すぐ西には1006号土壌がある。平面形は長辺が83cm、短辺が65cmの楕円形を呈し、深さは35cm。壁面は緩やかに立ち上がり、壇底は浅い凹レンズ状をなす。断面形は舟底状をなし、その規模や形状は1006号土壌によく似ている。

#### 1013号土壌 SK-1013 (Fig. 12)

調査区中央部の西縁の小土壌で、1m北に1003号土壌がある。平面形は長辺が103cm、短辺が90cmの隅丸方形プランをなす。壁面は深さ39cmで急峻に立ち上がるが、南壁は土壌状の掘り込みと重複するため緩やかである。壇底は浅い凹レンズ状をなす。

#### 1019号土壌 SK-1019 (Fig. 15)

調査区の南隅に位置する小土壌で、すぐ東には1021号土壌がある。

平面形は長辺が90cm、短辺が50cmの楕円形プランを呈し、深さは15cm。壁面は緩やかに立ち上がり、壇底は浅い凹レンズ状。

#### 1020号土壌 SK-1020 (Fig. 14・15)

調査区の南隅に位置する円形の小土壌で、東壁は1021号土壌に切られている。北壁を除いて未確認のため規模は明らかでない。壁高は15cmと薄く、壁面は緩やかに立ち上がる。

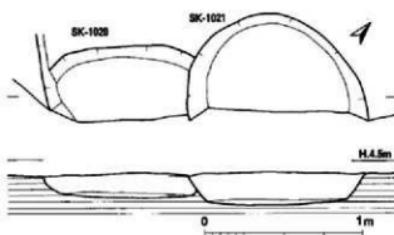


Fig. 14 1020・1021号土壌実測図 (1/30)

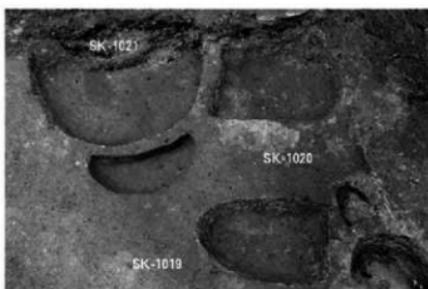


Fig. 15 1019～1021号土壌 (北より)

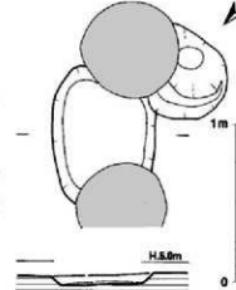


Fig. 16 1037号土壌実測図 (1/30)

## 1021号土壤 SK-1021 (Fig. 14・15)

調査区の南隅に位置する小土壤で、西壁側は1020号土壤を切っている。平面形は一辺が115cm余の円形プランにならう。深さは20cmで、壁面は緩やかに立ち上がり、壤底は浅い凹レンズ状をなす。

## 1037号土壤 SK-1037 (Fig. 16)

調査区の南部にある小土壤で、短辺が65cmの楕円形プランを呈し、長辺は90cm程にならう。壁面は緩やかに立ち上がる。

## 1038号土壤 SK-1038 (Fig. 17)

調査区の南縁にある小土壤で東には1040号土壤が主軸を東西に崩して並置している。平面形は長辺が90cm、短辺が55cmの隅丸長方形をなす。深さ35cmの壁面は急峻に立ち上がり、逆台形の断面形をなす。

## 1040号土壤 SK-1040 (Fig. 17・18)

調査区の南縁に位置する小土壤で、長辺は135cm、短辺は67cm。深さが17cmの壁面は緩やかに立ち上がる。壤底はフラットで、断面形は箱形。

## 1066号土壤 SK-1066 (Fig. 19)

調査区の西隅に位置する小土壤で、すぐ北東には1967号土壤がある。平面形は長辺が87cm、短辺が56cm、深さが15cmの隅丸長方形プランを呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形を呈する。

## 1067号土壤 SK-1067 (Fig. 19・21)

調査区の西隅にある小土壤で、径100cm程の円形にならう。深さが25cmの壁面は緩やかに立ち上がり、壤底は浅い凹レンズ状。

12は口径10.4cmの白磁皿。見込みに1条の圓線が巡り、釉剥の平底に墨書き痕がある。

## 1072号土壤

## SK-1072 (Fig. 20)

調査区西隅の1067号土壤の東に位置する。長辺が140cm、短辺が

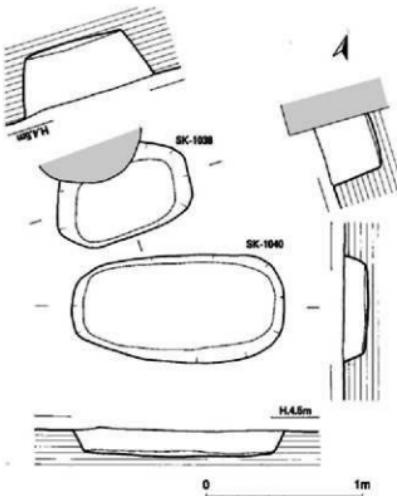


Fig. 17 1038・1040号土壤実測図 (1/30)



Fig. 18 1040号土壤 (北より)

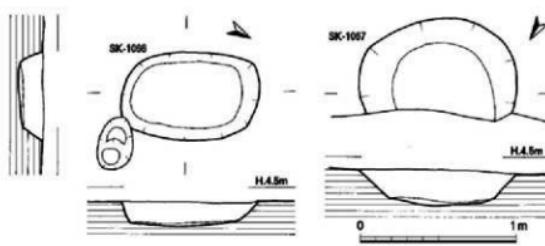


Fig. 19 1066・1067号土壤実測図 (1/30)

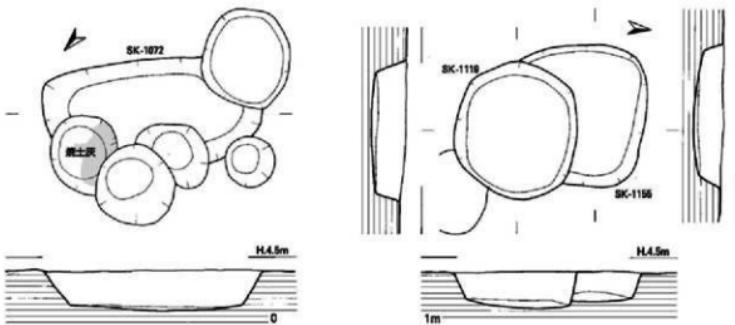


Fig. 20 1072・1119・1155号土壤実測図 (1/30)

70cmの隅丸長方形プランを呈し、緩やかに立ち上がる壁面は深さが26cm。壇底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は逆台形をなす。

1119号土壤 SK-1119 (Fig. 20・21・23)

調査区の中央部にあり、北壁は1155号土壤を切っている。平面形は長辺が87cm、短辺が78cmの円形プランを呈する。壁面はやや急峻で、壁高は23cm。壇底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は箱形になる。

13は口径10.4cm、器高が2.3cmの白磁皿。底部のみ釉剥げで淡灰白色。

1131号土壤 SK-1131 (Fig. 22・23)

調査区の中央部、1001号土壤の西にある。長辺が102cm、短辺が55cm、深さが25cmの隅丸長方形

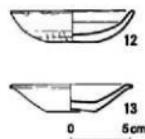
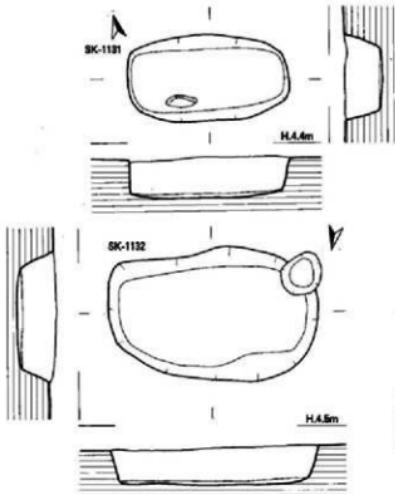
Fig. 21  
1067・1119号土壤  
出土遺物実測図 (1/4)

Fig. 22 1131・1132・1152・1168号土壤実測図 (1/30)

プランで南壁際に3cm厚の板石があり、状況的に墓壙の可能性もある。壁面は垂直で壙底は浅い凹レンズ状。断面形は箱形をなす。

#### 1 1 3 2 号土壤 SK-1132 (Fig. 22・23)

調査区の中央部、10号土壤の南に接してあり、1131号土壤と主軸を描えて並ぶ。平面形は、長辺が132cm、短辺が86cmの不整な隅丸長方形プランをなし、墓壙の可能性も考えられる。やや急峻に立ち上がる壁面は深さが25cmで、断面形は箱形をなす。

#### 1 1 5 2 号土壤 SK-1152 (Fig. 22)

調査区の中央部北寄りにあり、北隅壁は消失している。長辺が78cm、短辺が64cmの隅丸方形プランを呈す。深さ13cmの壁面は直口し、断面形は箱形。フラットな壙底は中央部が浅く窪む。

#### 1 1 5 5 号土壤 SK-1155 (Fig. 20・23)

調査区の中央部にある小型の土壤で、南壁は1119号土壤に切られている。平面形は一辺が90cmほどの隅丸方形プランになろう。深さが20cmの壁面は緩やかで、壙底は浅い凹レンズ状をなす。

#### 1 1 6 3 号土壤 SK-1163 (Fig. 5)

調査区の中央部に位置する長辺が100cm、短辺が75cmの不整形の土壤で、西壁は1162号土壤に切られる。覆土には炭片や焼土粒を含み、西に切り合う1162号土壤も同じ覆土である。

#### 1 1 6 7 号土壤 SK-1167 (Fig. 5)

調査区の北西縁にある大型の土壤で、北西壁は1169号土壤に切られている。平面形は長辺が200cm、短辺が135cmの楕円形プランを呈す。壁面は緩やかに立ち上がるが、西壁は上縁で浅いフラット面を作る2段掘りの構造をなし、壙底は中央部が凹レンズ状に窪む。

#### 1 1 6 8 号土壤 SK-1168 (Fig. 22)

調査区の中央部にあり、すぐ南に1118号井戸跡が隣接している。平面形は長辺が156cm、短辺が58cmの南北に長い隅丸長方

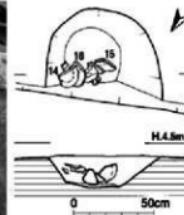
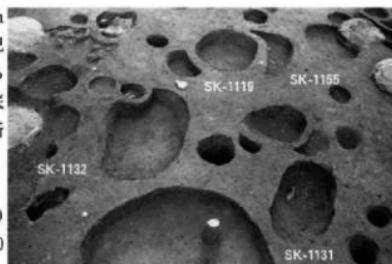


Fig. 24  
1169号土壤実測図 (1/30)

Fig. 23 1119・1131・1132・1155号土壤 (東より)



Fig. 25 1169号土壤 (南より)

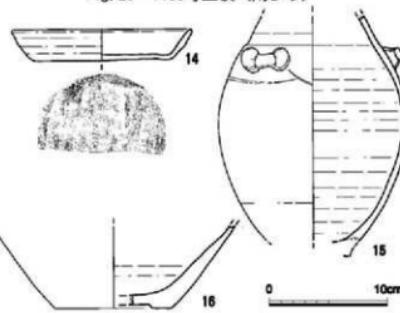


Fig. 26 1169号土壤出土遺物実測図 (1/4)



Fig. 27 1002号井戸跡（西より）



Fig. 28 1032号井戸跡土層断面（東より）

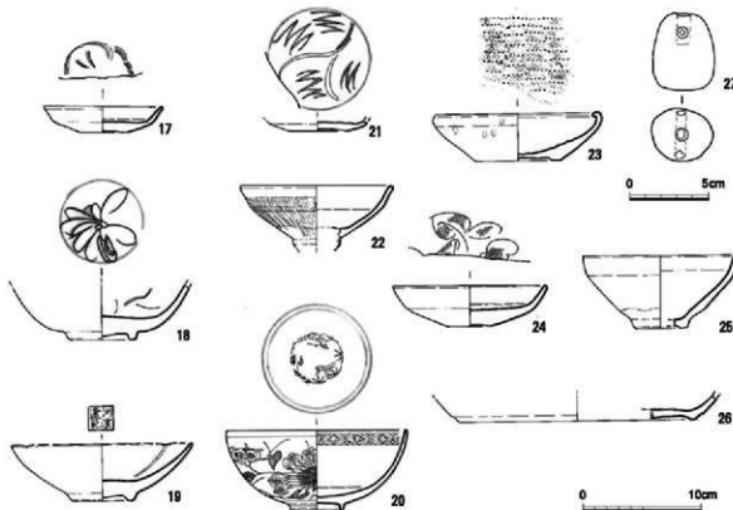


Fig. 29 井戸跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

形プランを呈する。西壁の南寄りには長さ20cm、幅が10cmほどの板石が壁面に沿って立て掛け、南北小口壁際にも同様の板材が覆うように被せられていた。壁面は緩やかに立ち上がり、平坦な壇底は南北へ緩やかに傾斜し、南北小口壁から55cmで更に凹レンズ状に窪む2段掘り状の構造をなす。西壁際の床面上から器種不明の鉄片が出土。形状を勘案すると墓壙の可能性が考えられる。

#### 1 1 6 9号土壙 SK-1169 (Fig. 24~26)

調査区の北西縁にある小土壙で、1167号土壙の北西壁上に位置する。平面形は東西長が45cmで南北長が60cmほどの橢円形プランにならう。深さ20cmの壁面は緩やかに立ち上がり、壇底は浅い凹レンズ状をなす。断面形は逆台形。覆土は黄褐色粘土砂の單一層で、土師器壊や陶器壺が出土した。

14は口径15.2cm、底径11.4cm、器高が2.6cmの土師器壊。体部はストレートに外反する。回転糸切り後に板目。15は肩部に弱い段を作る李朝陶器壺。肩部下に横位の耳を貼り付け、その下に波状の凹線が巡る。卵形をなす胴部の最大径は16cm。胎土は灰~灰黒色で、釉薬は褐色をおびたオリーブ色。16は底径が10cmの碁印底の陶器壺。灰色の胎土にオリーブ色の釉薬を施釉している。

#### 2) 井戸跡 (SE)

第1面では6基の井戸跡を検出した。2面で検出した井戸跡の中にも1面のものがある。このうち3基は平瓦を巻いて井側とした近世以降のものである。また、3基は素掘りの井戸で、井側には桶か曲げ物を用いたものと考えられるが、崩落を避けるために未確認。

#### 1 0 0 2号井戸 SE-1002 (Fig. 27・29・116)

調査区の中央部北端にある素掘りの井戸で、掘方は長辺が270cmの楕円

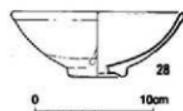


Fig. 30 1059号柱穴出土遺物実測図 (1/4)

形プランを呈し、短辺は220cmほどになろう。検出面から1mで径が80~85cmの円形プランの井側を検出した。この井側を80cm掘り下げたところで薄板片を確認したが壁面が崩落した。井側は曲げ物と推考される。

12は口径10cm、底径3.4cm、器高が2.2cmの龍泉窯の青磁皿。見込みに波状の櫛描文を描き、底部は無釉。18は高台径が5.8cmの龍泉窯青磁碗。見込みには片切彫の劃花文を描く。19は龍泉窯の輪花形青磁皿。口径15.4cm、高台径5.4cm、器高は4.8cm。見込みに印文があり、体部は圓線で区割りをしている。灰白色の胎土に半透明の青灰色釉を施釉する。20は肥前の草花文染付碗。

1032号井戸 SE-1032 (Fig. 28・29・116)

調査区の南隅にある素掘りの井戸跡。幅方は短辺が30cmで長辺は400cmの大型になる。井戸の中央に直径が85cmほどの井側があるが、2mほど掘り下げても井側本体は未検出である。

24は口径13cm、底径3.6cm、器高が3.4cmの龍泉窯青磁皿。見込みに櫛描きの花卉文を描く。底部は無釉。25は口径13.2cm、器高が6.2cmの天目碗。灰黒~明黄褐色の胎土に茶~黒褐色釉を施釉。23は口径が14.2cmの美濃瀬戸系灰釉卸皿。黄橙色の胎土に灰釉を流し掛け。26は三彩陶器壺片。

1118号井戸

SE-1118 (Fig. 5・29・116)

調査区の南隅にある井戸跡で1032号井戸跡に切られ、全容は不明である。

21は底径が4.8cmの同安窯の青磁皿。22は口径が12.8cmの白磁碗。

### 3) その他の遺構 (S P) (Fig. 5・30・116)

調査区からは多数の柱穴が検出されたが建物としてはまとまりらず、覆土中からは漆器や陶磁器などが出土している。

28は1059柱穴から出土した口径が14.6cmの白磁碗である。



Fig. 31 第2面遺構配置図 (1/150)

#### 4. 第2面の調査

第2面は、標高4.1～4.3mで検出した造構面である。このレヴェルは、第1面の造構面と一部重なるところがあり矛盾する。この数値の不整合は、東西に2分割して調査した不条理と時間的制約による観察不足に起因するものである。

検出した造構は土壌30基と土壌墓1基、井戸跡9基のほかに柱穴を検出した。

土壌は、方形～長方形プランと円～楕円形プランのものがある。このうち長方形プランのものは調査区の中央から西部にまとまって分布し、その中には墓壇を想起させるものがある。これは調査区の東縁で検出した土壌墓ときわめて似通った形状と状況からも窺える。

井戸跡は平瓦を巻いた1基を除いて、桶か曲げ物を井側とした素掘りである。また柱穴の中には建物跡の柱筋的なものもあるが、ひとつの造構としてはまとまらなかつた。

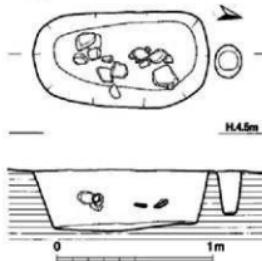


Fig. 34  
2001号土壌実測図 (1/30)



Fig. 32 第2面西側全景 (北より)



Fig. 33 第2面東側全景 (北より)



Fig. 35 2001号土壌 (西より)

### 1) 土 壤 (SK)

土壤は30基余を検出した。プラン的には、方形～長方形と円形～楕円形のものとに大別される。このうち長方形プランのものは調査区の中央に比較的まとまって分布する傾向があり、その中には状況的に墓壙を想起させるものがある。このことは調査区の東縁で検出した土壤墓にきわめて似た形状と状況から窺える。

#### 2001号土壤 SK-2001 (Fig. 34・35・37)

調査区西寄りにある南北軸の土壤で、すぐ北に2003号土壤がある。平面形は、長辺が111cm、短辺が60cmの隅丸長方形プランを呈する。深さが40cmの壁面はやや緩やかで、断面形は逆台形。壙底は南へ緩やかに傾斜する。覆土は堅い濃灰褐色土で、壙底上からは瓦片や礫石が全体に拡がっていた。墓壙の可能性も考えられる。

29は口径8.8cm、器高1.1cmの土師器小皿。

#### 2003号土壤 SK-2003 (Fig. 36)

2003号土壤は、調査区に中央部西寄りに位置する小型の土壤で、東に2004号土壤がある。平面形は長辺が82cm、短辺が57cmの隅丸長方形プラン。深さ17cmの壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は中央部が浅く凹レンズ状に窪む。断面形は緩やかな逆台形。北小口壁際から鹿角が出土した。

#### 2004号土壤 SK-2004 (Fig. 36・37・58・116)

調査区の中央部西寄りにあり、2m北西に位置する2052号土壤と主軸を描えて並んでいる。平面 Fig. 36 2003・2004・2052号土壤実測図 (1/30) 形は長辺が107cm、短辺が62cmの隅丸長方形プランをなし、両小口壁とも柱穴に切られている。深さが26cmの壁面は緩やかで、断面形は浅い舟底状。覆土は粗砂粒を含んだ暗灰黒色で、北側壁上縁から1枚の土師器小皿が出土した。2001号土壤ときわめて似た形状を示し、墓壙の可能性が考えられる。

30は口径2.3cmの土師器小皿。底部は回転糸切り後に板目痕。

61は鉄製鋏斧の破損品か。

#### 2052号土壤 SK-2052 (Fig. 36・37)

調査区の中央部西寄りに位置する土壤で、すぐ南には2003号土壤がある。平面形は北小口壁が消失しているが、短辺が62cmで長辺が105cmほどの隅丸長方形プランになろう。深さが20cmの壁面はやや急峻で、箱形の断面形をなす。土師器や須恵器片のほかに白磁小片が出土した。

31は口径8.8cm、器高1.4cmの土師器小皿。底部には浅い置付の高台を付けた痕跡が残る。

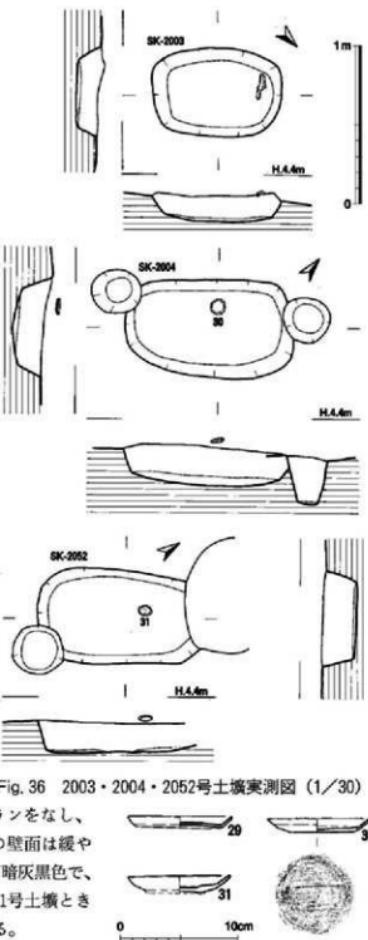


Fig. 37 2001・2004・2052号  
土壤出土遺物実測図 (1/4)

## 2062号土壤 SK-2062 (Fig. 38-39)

調査区の西縁、2039号井戸上に2063号土壤の北壁を切って掘り込んでいる。平面形は長辺が83cm、短辂が76cmのやや不整な隅丸方形プラン。深さ33cmの壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。土師器と須恵器片のはか平瓦や青磁碗・白磁碗・陶器片が出土。

## 2063号土壤 SK-2063 (Fig. 38-39)

調査区の西縁に位置する土壤で北壁は2062号土壤に切られる。平面形は短辂82cm、長辂は南壁が75cm、北壁が105cmの台形状を呈する。深さが40cmの壁面はやや緩やかに立ち上がり、壇底は浅く凹レンズ状に窪む。断面形は逆台形。須恵器甕や坏片と須恵質の平瓦片が出土した。

## 2079号土壤 SK-2079 (Fig. 40)

調査区の西隅にある南北軸の土壤。平面形は長辂が87cm、短辂が54cmの楕円形に近い隅丸長方形プランで、壁高は10cm。壁面は直線的に立ち上がり、箱形の断面形をなす。壇底は平坦で、南小口側にはピット状の浅い窪みがある。土師器や須恵器の甕片のはか白磁碗が出土。

## 2093号土壤 SK-2093 (Fig. 40)

調査区の中央部西寄りにある小土壤で、2094号土壤が北にある。長辂が63cm、短辂が39cmの隅丸長方形プランをなす。深さが14cmの壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。壇底は東側壁が低い。土師器や須恵器片のはか白磁碗が出土した。

## 2094号土壤

## SK-2094 (Fig. 40・116)

調査区の中央部西寄りにあり、すぐ南には2093号土壤が並置している。平面形は短辂が53cmで長辂が125cmほどになる葉巻状の隅丸長方形プランを呈する。壁面はやや緩やかに立ち上がり、

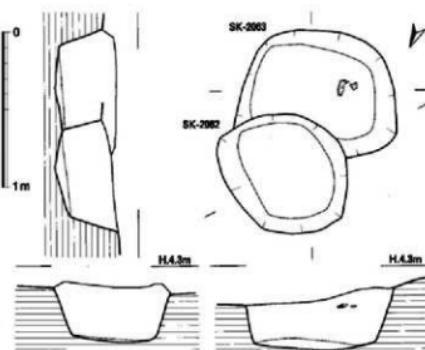


Fig. 38 2062・2063号土壤実測図 (1/30)



Fig. 39 2062・2063号土壤 (東より)

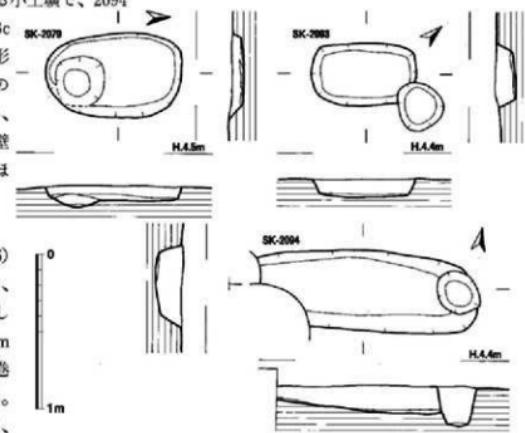


Fig. 40 2079・2093・2094号土壤実測図 (1/30)

壁高は17cm。断面形は逆台形をなし、壙底は西小口壁側が緩やかに高くなる。形状的に墓壙の可能性が考えられる。土師器や須恵器の甕、坏、小皿片のほか白磁や青磁片が出土した。

#### 2100号土壙 SK-2100 (Fig. 41)

調査区の中央部の西寄りにある南北軸の土壙で、西に2094号土壙が直交して位置する。平面形は長辺が111cm、短辺が49cmの隅丸長方形プランで、断面形は壁面が急峻に立ち上がる箱形。壙底は浅い凹レンズ状をなすが、小口は南壁が19cm、北壁が30cmと北へ緩やかに傾斜する。南の2001号土壙と主軸線を描えて並び、形状的に墓壙の可能性がある。土師器、須恵器、白磁碗が出土。

#### 2124号土壙 SK-2124 (Fig. 41・116)

調査区の北西隅に位置し、北へ1mの距離には2117号土壙がある。平面形は長辺が110cm、短辺は北壁が55cm、南壁が90cmの台形状に近い隅丸方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。壙底は中央部が浅く凹レンズ状に窪み、壁高は33cm。覆土は濃灰褐色土で、土師器や須恵器の甕、坏片のほかに青磁碗片等が出土している。

#### 2131号土壙 SK-2131 (Fig. 41・58・116)

調査区の中央部南辺に位置する小土壙で、すぐ南には2135号土壙がある。南壁が1118号井戸に削平されているが、平面形は一辺が85～90cmの円形プランになろう。断面形は箱形をなし、深さ30cmの壁面は垂直ぎみに立ち上がる。土師器や須恵器の甕・坏片と青磁と陶器片が出土。

62は現長5.3cmの不明鉄器片。基部に木質痕があり、刀子か工具の茎か。

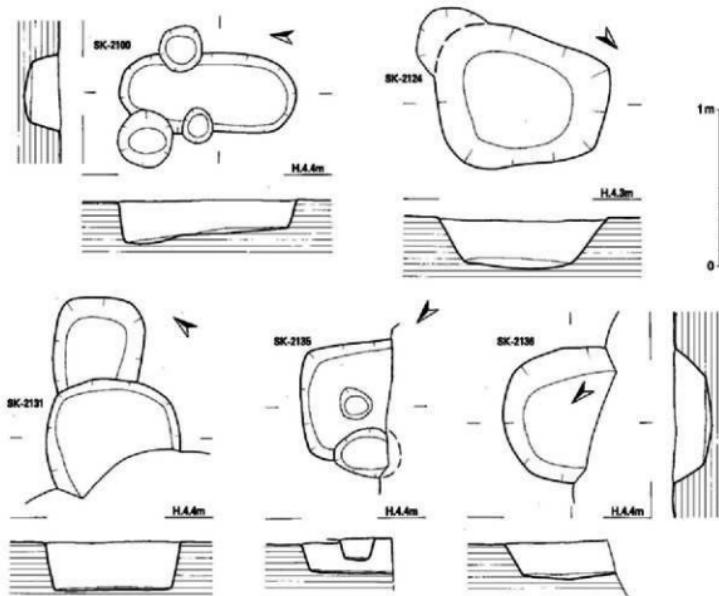


Fig. 41 2100・2124・2131・2135・2136号土壙実測図 (1/30)

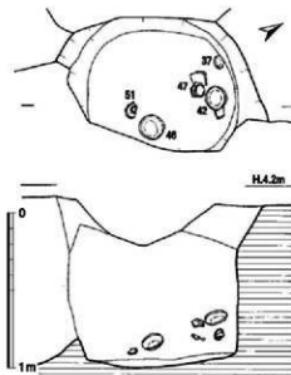


Fig. 42 2143号土壤実測図 (1/30)

2135号土壤 SK-2135 (Fig. 41)  
調査区中央部の南辺に2136号土壤と並んで位置する。西半部は1032号井戸に削平される。平面形は短辺が75cm、長辺が100cmほどの隅丸長方形プランになろう。深さ20cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形。覆土は暗灰茶色土で土師器や須恵器の壊片のほか瓦器廣塊と白磁小片が出土した。

2136号土壤 SK-2136 (Fig. 41・116)

調査区の中央部南辺に2135号土壤と並んで位置する小土壤で、西半部は1032号井戸に削平されている。平面形は西壁が消失により明らかでないが、短辺が85cmの梢円形プランになろう。深さが25cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形になろう。覆土は濃い灰茶色土で土師器壺、环、小皿

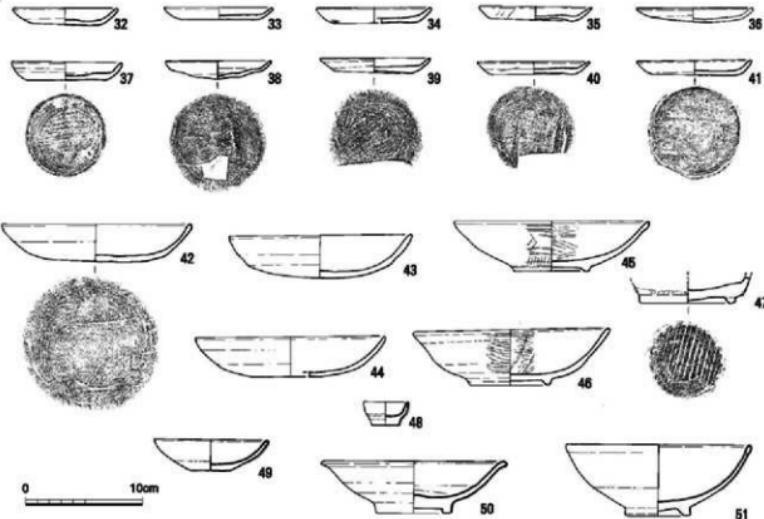


Fig. 44 2143号土壤出土遺物実測図 (1/4)



Fig. 43 2143号土壤 (南東より)

や須恵器坏、大壺片のほか白磁、青磁、陶器片が出土。

#### 2143号土壤 SK-2143

(Fig. 42・43・44)

調査区の中央部南寄りにあり、東壁側は2130号井戸によって削平されている。平面形は削平が著しいが、底面から勘案して一辺が130cmほどの円形プランをなす。壁面は壌底から垂直に立ち上がる後、壌底から75cmの高さで屈曲して緩やかに立ち上がる。浅く凹レンズ状に窪む壌底のレヴェルは3.05mで井戸と考えるには湧水点に達していない。壌底から白磁碗や皿のほかに土師器坏、小皿、須恵器坏、瓦器塊等の完形品がまとめて出土した。覆土は暗灰褐色土で下層は粗砂が多い。

32~41は土師器小皿。口径が8.9~9.2cm (32・33・38) と9.4~10.2cm (34~37・39~41) のものに大別される。底部は32・34・35が糸切りのほかは糸切り後に板目痕。42~44は口径が15.8~16.2cmの

土師器坏。丸底で、体部は内湾気味に立ち上がる。42は器高3.3cmで底部は糸切り後に板目痕。43は器高3.8cm。44は器高3.5cm。45・46は口径が16.6cmの瓦器塊で、体部はストレートに立ち上がる。内外とも粗いヘラ研磨。器高は45が4.3cm、46が4.9cm。47は高台径が8cmの須恵器坏。底部はヘラ切り後に板目痕、その後高台を貼り付ける。48~51は白磁。48はミニチュア碗で口径3.8cm、器高は2cm。49は口径9.6cm、器高2.6cmの平底皿。50は口ハゲの碗で、口径15.6cm、器高4.4cm。51は玉縁口縁の碗で口径15.6cm、器高6cm。体部は高台から1/3を残して施釉。

#### 2144号土壤 SK-2144 (Fig. 45・46・116)

調査区の南東隅にある大型の土壤で、東壁は2175号井戸を切り、2176号土壤に切られている。平面形は長辺が315cm、短辺が215cmの不整な椭円形プランを呈する。深さが25cmの壁面はやや急峻に立ち上がり、

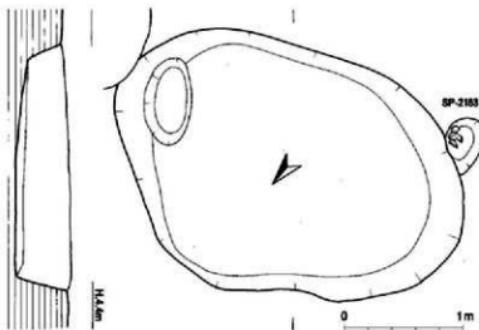


Fig. 45 2144号土壤実測図 (1/40)

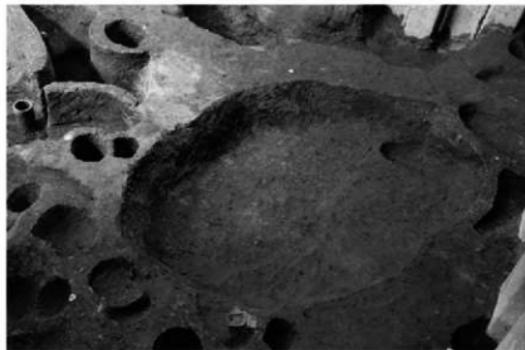


Fig. 46 2144号土壤 (北より)

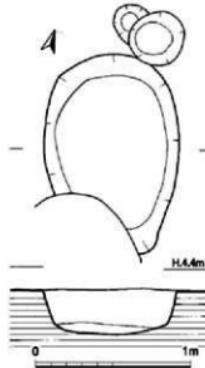


Fig. 47 2145号土壤実測図 (1/30)

箱形の断面形をなす。壇底はほぼ平坦で、東壁際に長辺が72cm、短辺が40cm、深さが15cmの楕円形のピットがあるが、これが土壤に付帯するものかは明らかでない。青磁碗・壺・皿・合子、白磁碗、綠釉陶器、須恵器壺・环蓋・高坏、土師器壺・高坏・小皿、瓦器塊のほかに平瓦や土鈴など多種多様な遺物が出土した。

#### 2145号土壙 SK-2145 (Fig. 47・48・49)

調査区の東縁にあり、東壁は2146号土壙を切り、南小口壁は搅乱で消失している。平面形は短辺が86cmで長辺が125cmほどの隅丸長方形プランになろう。深さが28cmの壁面はやや急峻に立ち上がる。壇底は凹レンズ状で、断面形は浅い舟底状をなしでいる。覆土からは土師器壺と环片のほかに白磁片、陶器片が出土した。

#### 2146号土壙 SK-2146 (Fig. 48・49)

調査区の東縁にあり、北西壁は2145号土壙に、南壁は2147号土壙に削平される。平面形は長辺が190cm、短辺が140cmほどの楕円形プランになろう。深さが80cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。北壁は壇底から50cmに半月状の小さなフラット面を作る2段掘りの構造をなす。壇底は中央部が僅かに窪み、標高3.45m。青磁碗・皿のほかに陶器壺・盤、須恵器壺・壺・环蓋、土師器壺・壺・小皿や瓦器塊等が出土した。

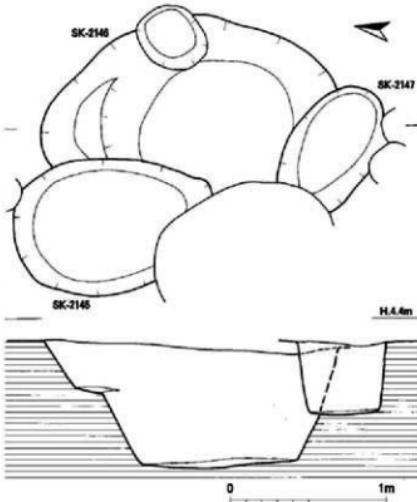


Fig. 48 2145～2147号土壙実測図 (1/30)

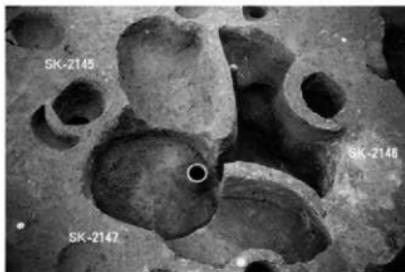


Fig. 49 2145～2147号土壙 (南より)

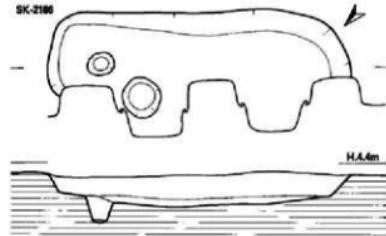
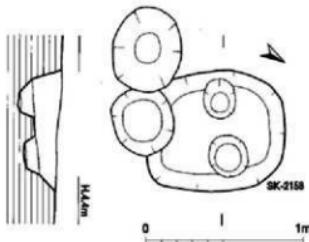


Fig. 50 2158・2186号土壙実測図 (1/30)

2147号土壤 SK-2147 (Fig. 48・49・58・116)

調査区の東縁に位置する小土壤で、北側壁は2146号土壤を切っている。平面形は短辺が55cmで長辺が90cmほどの楕円形プランになろう。深さが47cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形をなす。青磁片や土師器壺・环・須恵器片のほかに弥生土器の丹塗高环片が出土した。

63は両端を折り曲げた梯形鋳造鉄斧。

2158号土壤 SK-2158 (Fig. 50)

調査区の東部にあり、東に2144号土壤、北に2147号土壤がある。平面形は長辺が85cm、短辺が76cmの方形プラン。緩やかに立ち上がる壁面は深さ15cm。断面形は逆台形。東西壁下のフラットな壇底に小ピットがある。陶器片や須恵器壺、土師器丸底壺・甕・高环・弥生壺片が出土。

2182号土壤 SK-2182 (Fig. 31・58)

調査区の北東端にある不整な楕円形プランの小土壤で、南に2145号土壤、西に2186号土壤がある。深さ23cmの壁面は緩やかで、東西の両壁側に浅いフラット面を作る。白磁片と須恵器や土師器の甕・环・壺蓋が出土した。

64は細い基部に刃部状の研出しがある。鍛か工具。

2186号土壤 SK-2186 (Fig. 50)

調査区の北東隅に位置する土壤で、すぐ南には226号土壤が、また南東には2146号土壤などが隣接している。土壤の大半は調査区外に拡がって判然としないが、平面形は一辺が210cmの方形プランになろうか。深さ21cmの壁面は緩やかで壇底は中央部が浅い凹レンズ状をなす。断面形は逆台形。陶器片や須恵器壺片、土師器丸底壺・甕・高环のほかに弥生の壺片が出土した。

2195号土壤 SK-2195 (Fig. 51・52・57)

調査区の北東部にある。平面形は長辺が97cm、短辺が45~55cmの西小口壁がやや窄まった隅丸長方形プランを呈す。深さ27cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形。平坦な壇底は東小口壁から西小口壁にむかって緩やかに降っていく。形状的に墓壙の可能性もある。青磁や陶器片、土師器小皿・环・須恵器片が出土。

52は1類の龍泉窯青磁碗で口径

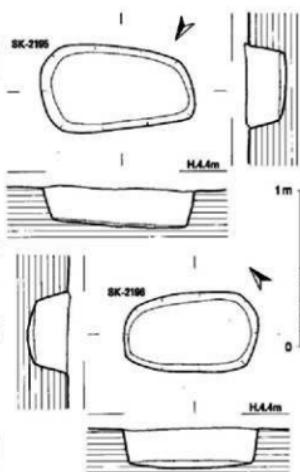


Fig. 51 2195・2196号土壤実測図 (1/30)

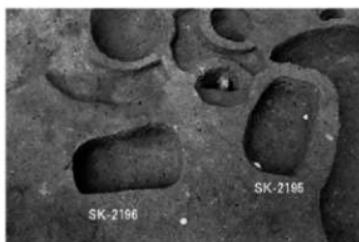


Fig. 52 2195・2196号土壤 (東より)

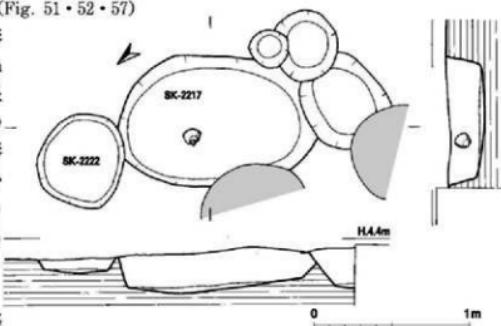


Fig. 53 2217号土壤実測図 (1/30)

16cm、雲文を描く。5  
3は見込みに花文を描  
く青白磁皿。

2 1 9 6 号土壤

S K - 2196

(Fig. 51・52)

調査区北東部に位置  
し、すぐ北に2195号土  
壤がある。平面形は長  
辺が85cm、短辺が35  
~48cmの北小口壁が  
やや窄まった隅丸長方  
形プラン。壁面はやや  
急峻で、壁高は27cm。  
壤底は浅い凹レンズ状

をなし、断面形は浅い舟底状を呈する。2195号土壤にきわめてよく似た  
形状をしている。青磁碗片や白磁碗片のほか土師器壺・皿、須恵器壺・  
坏蓋片が出土した。

2 2 0 5 号土壤 S K - 2205 (Fig. 31・57)

調査区の中央部にあり、一辺が約140cmの円形プランになろう。壁面  
は緩やかに立ち上がり、深さは30cm。断面形は逆台形をなす。青磁碗  
や皿、土師器壺、須恵器壺片が出土した。

54は口径16cm、器高3cmの土師器壺。底部は糸切り後に板目。

2 2 1 5 号土壤 S K - 2215 (Fig. 31・57)

調査区中央部にある楕円形の土壤で、短辺は130cm。深さ20cmの壁  
面は緩やかで、断面形は浅い舟底状の断面形。青磁碗や白磁碗が出土。Fig. 55 2226号土壤実測図 (1/30)

55はII類の白磁碗で  
口径16.4cm。玉縁口  
縁で体部下半まで施釉。

56はIV類の白磁碗で口  
径は17.6cm。見込み  
に圓線が巡る。体部下  
までベージュ色の施釉。

57は口径が8.8cmの陶  
器壺で58と同一個体か。  
頭部は短く直口し、口  
縁端部は小さく突き出  
して上縁は圓線状に浅  
く窪む。茶オリーブ釉  
を施釉する。

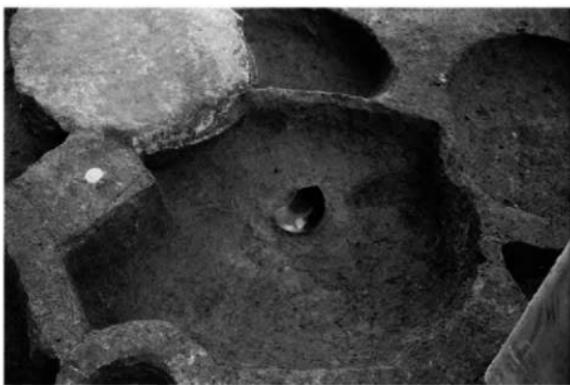


Fig. 54 2217号土壤 (南より)

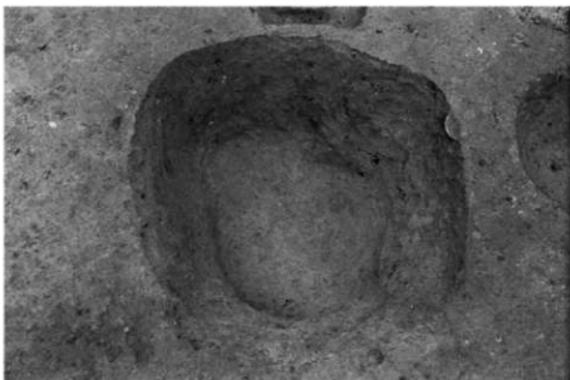
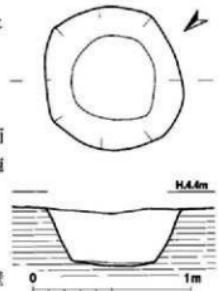


Fig. 56 2226号土壤 (南より)

## 2217号土壤

SK-2217 (Fig. 53・54・57)

調査区の東部にあり、東に2225号土壤が位置している。

平面形は長辺が130cm、短辺が84cmの楕円形プランをなす。南壁が緩やかなほかはやや急峻に立ち上がる。壙底は浅い凹レンズ状で断面形は箱形。瓦器塊や土師器皿・甕、須恵器环蓋・青磁が出土。

59は口径16.3cmの内黒瓦器塊。内外ともヘラ研磨。

## 2226号土壤

SK-2226 (Fig. 55・56)

調査区の北東隅にある土壤で、北に2186号土壤が、東に

2145号土壤が隣接している。Fig. 57 2195・2205・2215・2217・2240号土壤出土遺物実測図 (1/4)

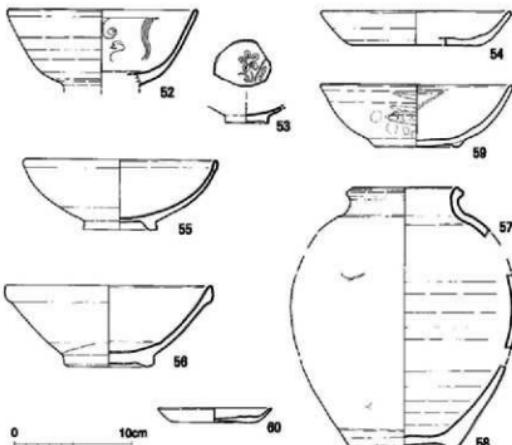
平面形は長辺が91cm、短辺が87cmの方形プランを呈し、南東壁がやや窄まる。深さが37cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壙底は中央部が浅い凹レンズ状になる。白磁や陶器片のほかに須恵器甕・环・坏蓋、土師器甕・小皿、瓦器塊などが出土。

## 2240号土壤 SK-2240 (Fig. 31・57)

調査区の中央部にあり、北に2196号土壤が隣接する。

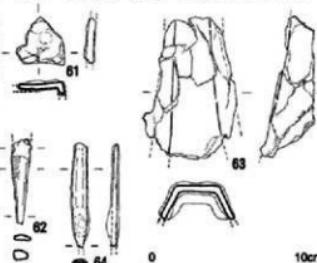
平面形は長辺が117cm、短辺が98cmの不整な楕円形プランで深さは20cm。断面形は箱形。青磁碗や白磁碗、瓦器塊、須恵器环・甕、土師器坏片、弥生甕片が出土。

60は口径が9.6cm、器高が1.2cmの土師器小皿で、底面はヘラ切り後に板目圧痕。



0 10cm

Fig. 57 2195・2205・2215・2217・2240号土壤出土遺物実測図 (1/4)



0 10cm

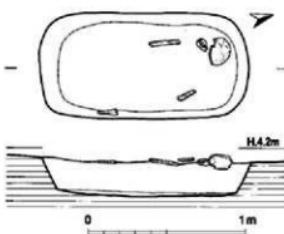


Fig. 59 2250号土壤墓実測図 (1/30)



Fig. 60 2250号土壤墓 (南より)

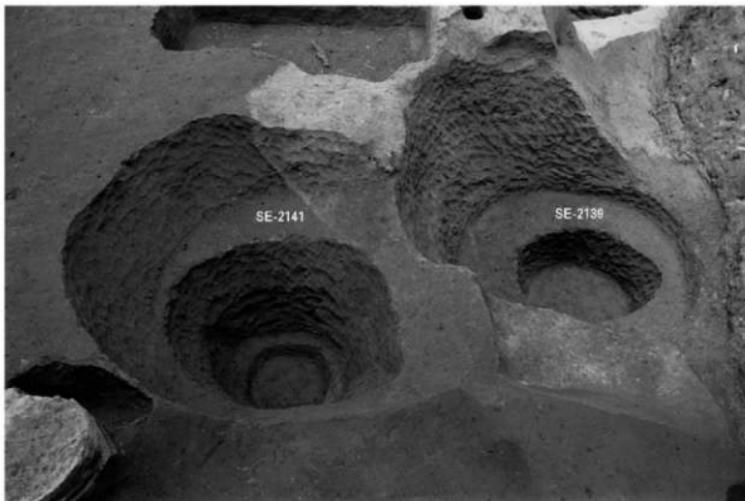


Fig. 61 2139・2141号井戸跡（北より）



Fig. 62 2141号井戸跡土層断面（南より）

## 2) 土壙墓

(S R)

土壙墓は調査区の北東部で人骨を埋納した1基検出した。しかし、土壙の中には形状的に墓壙の可能性を示唆するものもあり、実数や拡がりは明らかでない。

2250号土壙墓

S R - 2250

(Fig. 59・60)

調査区の北東部に位置する南北軸の土壙墓である。長辺は132cm、短辺が65cm、深さが22cmの隅丸長方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。壙底から15cm上で北壁を頭位にして西を向いた頭蓋骨が検出された。両側壁に沿って上腕骨が、南壁の東壁際から大腿骨を検出した。頭を西に向け、腕を胸元に折り曲げて屈葬したと考えられる。

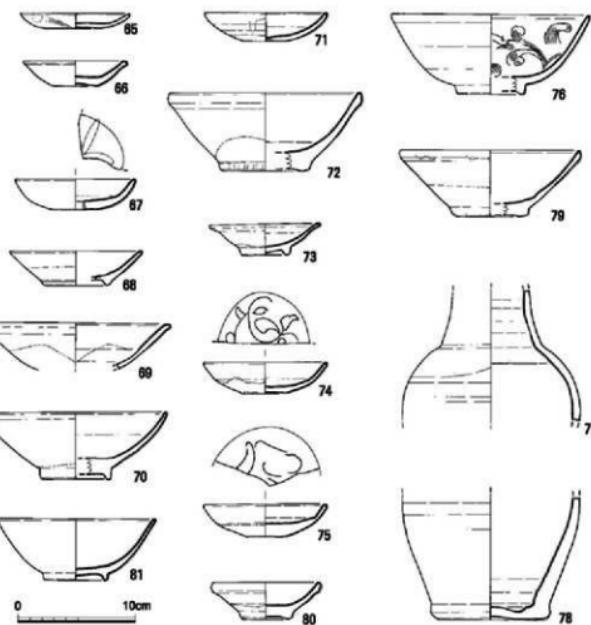


Fig. 63 井戸跡出土遺物実測図 (1/4)

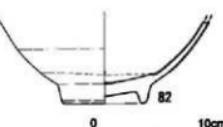
## 3) 井戸跡 (S E)

第2面では9基の井戸跡を検出したが、このうちには第1面から掘り込まれた井戸跡もある。井戸はすべてが掘方の大きい素掘りのもので、井側には桶か曲げ物を用いていた。

2130号井戸 S E - 2130 (Fig. 31・61・63)

調査区の中央部南縁にある素掘りの井戸で、堀方は4.2~4.4mの大きな円形プランを呈する。検出面より80cmで直径が100cmの井側痕を検出したが完掘には至らなかった。青・白磁の碗・皿・壺、土師器や須恵器の甕・壺・高壺、瓦器塊のほか弥生の甕や壺などが出土した。

65は口径9.2cmの土師器小皿。66~68は白磁皿。67は見込みに片切彫りで花文を描く。IV類。68はII類の高台付皿で2140号井戸出土片と接合。見込みは蛇の目軸剥ぎ。69は口径16cm。口縁部は小さく摘み出す。79はIV類の白磁碗。見込みは蛇の目の軸剥ぎで口径は15.4cm。

Fig. 64 2099号柱穴  
出土遺物実測図 (1/4)

## 2139号井戸

S E - 2139

(Fig. 31・61・63)

調査区西端にある素掘りの井戸で、2141・2142号井戸より新しい。掘方は直徑が2.7~3mほどの円形プランになろう。検出面下110cmで直徑95~105cmの井側を検出し、-120cmで基盤層に達して曲げ物を検出した。更に40cm掘り下げて井戸底に達する。標高は1.1m。

71はII類の白磁皿で口径は10.4cm。淡い透明釉を掛け、見込みには1条の圓線が巡る。72はIV類の白磁碗。口径16.4cm、器高は6.6cm。見込みに1条の圓線を描く。

## 2140号井戸

S E - 2140

(Fig. 31・63)

調査区の南西隅にある井戸で、1032号井戸に削平され詳細は不詳。

73は口径が9.6cmの白磁皿。淡オリーブ釉に貫入がある。74はIV類の白磁皿。見込みにヘラ描きの花文を描く。75は龍泉窯青磁皿。見込みに花文を描き、底部に目砂が付着。76は口径16.8cmの龍泉窯青磁碗。疊付まで施釉

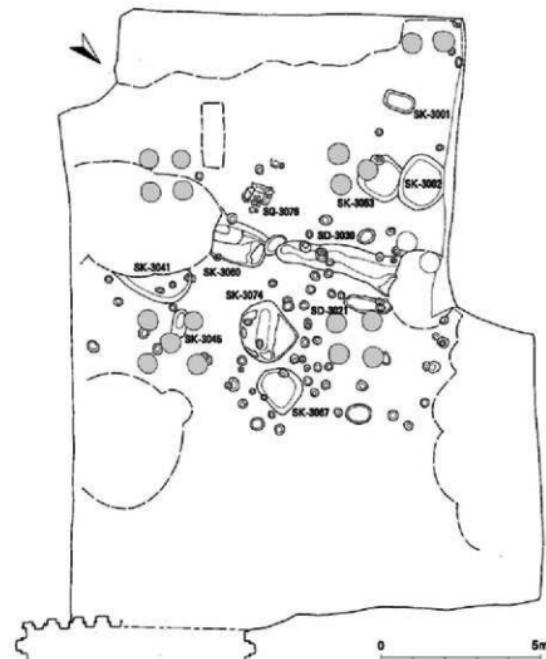


Fig. 65 第3面遺構配置図 (1/150)

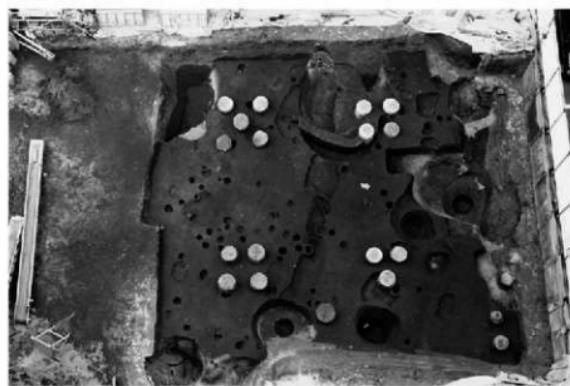


Fig. 66 第3面西側全景 (北より)

し、内面に劃花文を描く。77は無釉の陶器。内面に銀化したガラスが付着し、埴燒への転用品か。78は同一品。

#### 2 1 4 1 号井戸 S E - 2141 (Fig. 62-63)

調査区の西縁にある井戸で2139号井戸に切られる。平面形は直径が2~2.2mの円形プランになろう。検出面より-1.7mで直径が55~60cmの井側を検出し、-90cmで基盤層の砂丘面に達する。この基盤層上から高さ20cmの曲げ物を2段重ねて井側にしている。井戸底は標高1.5m。79はIV類の白磁碗。淡白色の半透明釉で口径は15.4cm。

#### 2 1 4 8 号井戸 S E - 2148 (Fig. 31-63)

調査区の南東隅にあるが調査区外に拡がる。

80は玉縁口縁の白磁皿で口径9.3cm、器高は3.1cm。

#### 4) その他の遺構 (S P) (Fig. 31・64・117)

調査区からは多数の柱穴が検出されたが建物としてはまとまらず、覆土中からは土師器や須恵器、陶器などが出土している。

82は2099号柱穴から出土した高台径が7.2cmの磁器壺である。灰オリーブ色の半透明釉を掛ける。見込みは釉剥ぎ。

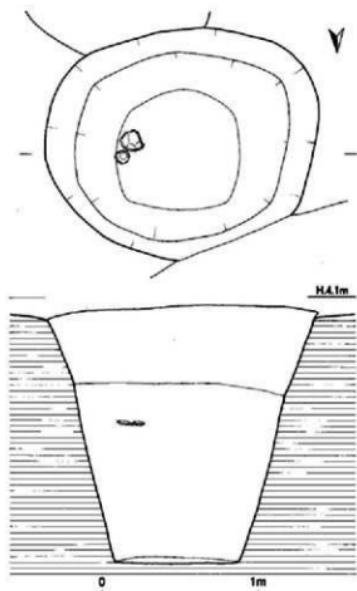


Fig. 68 3002号土壤実測図 (1/30)

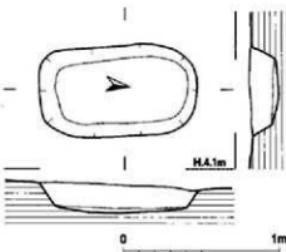


Fig. 67 3001号土壤実測図 (1/30)

### 5. 第3面の調査

第3面は、第2面の遺構が掘り込まれた第II層の遺物包含層を20cmほど掘り下げて検出した遺構面で、標高4.0mである。発掘調査は、東側の調査区が時間的な制約から詳細な遺構の確認を割愛してメモ的な記録観察に終始した。そのため第2面や第4面のように全域を精査して確認した遺構の濃密な分布に較べて、東側ではブラックホール的な空白域が拡がるが、これが第3面の遺構の全容を示しているものではない。

検出した遺構は、土壤8基と石棺状の石組遺構

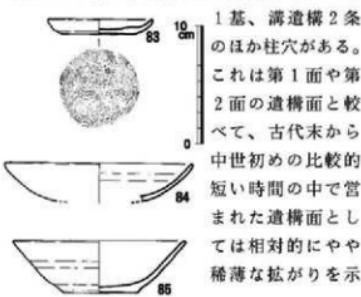


Fig. 69 3002号土壤出土遺物実測図 (1/4)



Fig. 70 3002号土壤（南より）



Fig. 71 3002号土壤断面（南より）

していると云えよう。また、第4面の遺構のうち4003号土壙より東に拡がる土壙や柱穴の中には第3面のものが含まれるが、混乱を避けるため便宜的に第4面の遺構として扱った。なかでも4044号住居跡上に東西に並んだ柱穴は第3面の遺構であり、建物の柱筋の可能性をもつものである。

### 1) 土 壙 (SK)

土壙は調査区中央部の西寄りで8基を検出した。プラン的には、長方形のものと円形～楕円形のものとに大別され、前者は小型、後者はやや大型になる傾向を示している。このうち長方形プランの土壙は2基に過ぎず、円形～楕円形プランのものが多くを占める。分布的な拡がりは、長方形プランのものは調査区の東西に単独に分かれている。これに対して円形～楕円形プランの土壙は3030号溝遺構を挟んで東西に比較的まとまって分布する傾向が窺われる。また、その機能や目的を明確に示す資料は確認できなかった。

#### 3001号土壙 SK-3001 (Fig. 67)

調査区西端に位置する南北軸の小土壙で、東2mの距離には3053号土壙がある。平面形は長辺が110cm、短辺が60cmの隅丸長方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は20cmを測る。壇底は中央部が浅く凹レンズ状に陥り、断面形は逆台形をなす。覆土は粗砂粒を含んだ灰褐色砂土の單一層で、形状的に墓壙の可能性も考えられる。土師器壺・高坏・器台・坏片と須恵器壺・坏片が出土した。

310は長さが3.7cmの土鍤である。

#### 3002号土壙 SK-3002 (Fig. 68・69・70・71・80・119)

調査区の北西縁、3030号溝遺構の西にあり、南壁は3053号土壙の北壁を切っている。平面形は長辺が173cm、短辺が145cmの円形プランを呈する。壁面はフラットな壇底から110cmほど緩やかに傾斜して立ち上がった後に、小さく屈曲してさらに外方に開いて立ち上がる。壁面の深さは163cmあり、標高は2.43m。第2面を含めた土壙の中で、井戸を除いて最も深いが湧水点までには達していない。井戸としての機能も考えられなくもないが詳細は明言できない。断面形は2段掘りの逆台形をなして

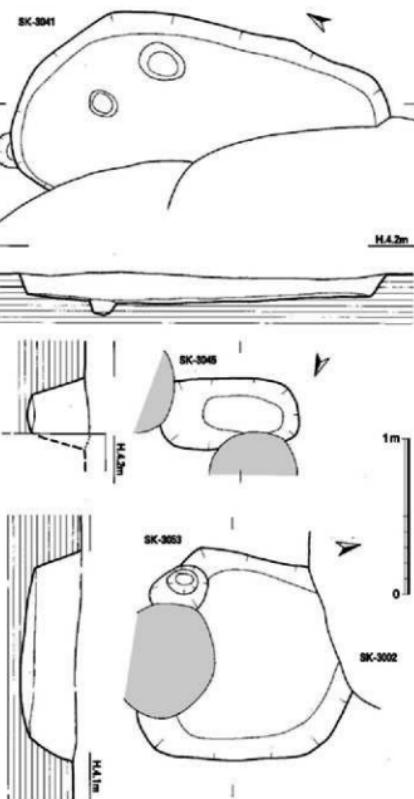


Fig. 72 3041・3045・3053号土壙実測図 (1/30)

いる。東壁に沿った壙底から85cmの高さで土師皿が並んで出土したほか下層から中層にかけて青磁碗・鉢、白磁碗、土師器甕・鉢・高环・环・小皿、須恵器甕・鉢・环・环蓋、内黒瓦器甕のほかに弥生土器の大形甕片が比較的まとまって出土した。

83は口径が9.1cm、器高が1.3cmの土師器小皿。底部は糸切り後に板目圧痕。84は口径が16cmの土師器皿で、スヌが付着。85は口径14.6cm、底径6.4cm、器高が4.4cmの土師器環。回転糸切り後に板目圧痕。31-1~313は長さが3.7~4.2cmのSタイプの土鍤。86は厚さが約2mmの五角形をした不定形な鉄片で鍛造品か。

#### 3041号土壤 SK-3041 (Fig. 72・119)

調査区の中央部南辺に位置する南北軸の大型の土壤で、すぐ北には3045号土壤がある。土壤は北東壁を残して大半が1032・1118号井戸に削平されているが、長辺が240cmの梢円形プランで、短辺は13.0cmほどにならう。壁面は北壁を除いて緩やかに立ち上がり、壁高は20cmを測る。断面形は逆台形をなし、壙底は中央部が浅く凹レンズ状に窪んでいる。北壁と東壁側に直径が22~30cm、深さ10cmほどの2本の小ピットが掘り込まれている。遺物は須恵器甕・环・环蓋、土師器甕片のほかに瓦器甕が出土している。

314は長さが4.7cmのSタイプの土鍤である。

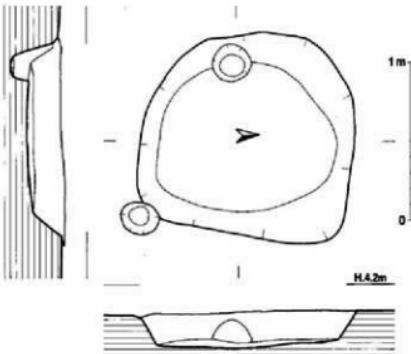


Fig. 73 3067号土壤実測図 (1/30)

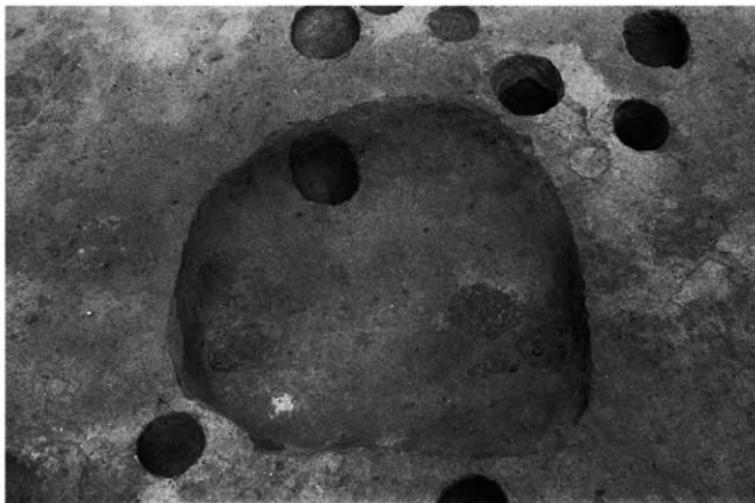


Fig. 74 3067号土壤 (東より)

## 3045号土壤 SK-3045 (Fig. 72)

調査区の南西部に位置する東西軸の小土壤で、すぐ南には3041号土壤がある。平面形は長辺が90cm、短辺が45cmの隅丸長方形プランを呈する。深さが40cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなしている。3030号溝造構を挟んで対峙する3001号土壤に較べると規模的には小さいが、類似した形状を示しており墓壙の可能性が全くないとは言い難い。遺物は土師器甕・鉢と須恵器環・环蓋片が出土している。

## 3053号土壤 SK-3053 (Fig. 72)

調査区の北西辺、3030号溝造構の西に位置するやや大型の土壤で、北西壁は3002号土壤に削平されている。

平面形は東西長が133cm、南北長が145cmほどになる。隅丸方形プランをなす。深さが38cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなしている。壙底は凹レンズ状に浅く窪む。土師器甕・鉢・环・須恵器甕・环・环蓋のほかに弥生鏡片や磁器碗が出土した。

## 3060号土壤 SK-3060 (Fig. 65・66・119)

調査区の中央部西寄りに位置する大型の土壤で、3076号石組造構のすぐ東にあり、南壁は1118号井戸で削平されている。平面形は短辺が130cmの長方形プランをなし、壁面は緩やかに立ち上がる。北壁から東壁側には2段の浅いフラット面が付き、壙底は長辺に沿って15~25cmと幅が狭くなる。北にある3030号溝造構の延長のような趣がある。壙内からは土師器甕・环・須恵器甕・环・环蓋・甕のほかに白磁碗や平瓦が出土した。

315は長さが6cmのMタイプ、316は長さが4cmを測るSタイプの土鍤である。

## 3067号土壤 SK-3067 (Fig. 73・74・119)

調査区の中央部東寄りにあり、すぐ西には3074号土壤が隣接している。平面形は南北長が140cm、東西長が134cmの隅丸方形プランを呈するが、西壁は弧状を膨らんで半円半方形状をなしている。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壙底は平坦で、壁高は22cm。遺物は白磁碗片のほかに土師器甕・环・須恵器甕・环・环蓋・甕と弥生鏡片などが出土した。

317はSタイプ、318はLタイプの土鍤である。

## 3074号土壤 SK-3074 (Fig. 75)

調査区の中央部東寄りに位置し、西には3030号溝造構が、すぐ東には3067号土壤がある。平面形は南北長が185cm、東西長が160cmの不整な隅丸方形プランを

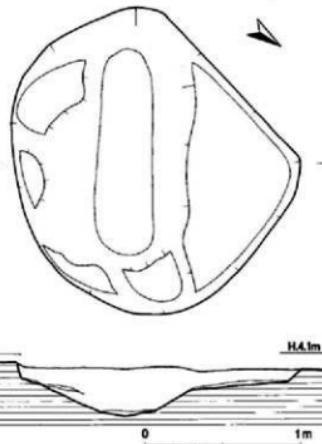


Fig. 75 3074号土壤実測図 (1/30)

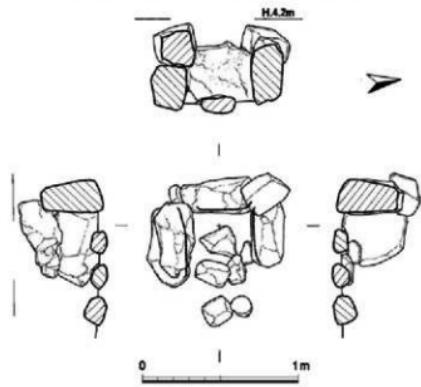


Fig. 76 3076号石組造構実測図 (1/30)



Fig. 77 3076号石組遺構（北より）



Fig. 78 3076号石組遺構（東より）

なし、すぐ東にある3067号土壙と良く似た形状を示している。壙底は上縁から45°東に直交するように長さが130cm、幅が35cmの長方形のプランを描く。壁面は緩やかに立ち上がるが、壙底から29cmほどの高さで北壁側に1面、東～南壁側に4面の小さなフラット面を作る2段掘り状の構造をなしている。壁高は35cmを測る。遺物は土師器壺・高环・环・环蓋と須恵器壺・鉢・环・环蓋などが出土した。

320・321はMタイプ、319・322はLタイプの土壙である。

### 2) 石組造構 (S Q)

調査区の西寄りで大きめの角礫を矩形に積んだ石組造構を検出した。このような石材を積み上げたものは本調査の全般にわたっても検出されていない。この期の造構は遺物を伴うものの明確な造構は検出されなかった。本調査区を中心に概観しても集落構造は抜がっているものの墳墓と思われるものは少ない。周辺調査の成果と合わせて検討する必要がある。

#### 3076号石組造構 S Q - 3076 (Fig. 76・77・78)

調査区の中央部西寄り、3060号土壙のすぐ西に位置している。平面プランは現状で、南北幅が42～45cm、東西幅が42cmの矩形をなしている。床面上には15～20cm大の円礫と角礫が疎らではあるが、敷石状に並んでおり、本来は長方形プランをなしていたと考えられる。立石は幅が40～45cm、高さが30～45cm、厚さが20～25cmの板状の角礫を横位に立て並べ、南壁石と北西壁の隅角上に角礫を積み上げている。立石は西壁石を南北の壁石で挟むようにして立てられている。これらの形状や構造を勘案すると、西壁石を奥壁とした長方形プランの小石室を想起させるが、明言はできない。石組内からの出土遺物はない。また、この石組は第3面の造構面を形成する茶褐色砂層の第Ⅲ層の上層下に構築されている。

### 3) 溝造構 (S D)

溝状の造構は調査区西寄りの北側で2条を検出した。ただ、短い1条は断面形から溝造構としたが、機能的にそうであったかは明らかではなく、甚だ疑いが残る。明らかな溝造構については、断片的であり機能については北隣の第50次調査区の成果と考え合わせて再考する必要があろう。

#### 3021号溝造構 S D - 3021 (Fig. 79)

調査区の中央部北辺を南北に延びる1.5m余の溝状の造構で、北端は1002号井戸によって削平されている。幅は約50cmで、深さは10cmと浅い。断面形は箱形をなし、西壁側に傾斜している。形状的に細長の土壙の可能性も考えられる。土師器片等が出土した。

#### 3030号溝造構 S D - 3030 (Fig. 79・80・119)

調査区の中央部北辺を南北方向に延びる溝造構で、北側は1002号井戸に削平されている。幅は南端が70cm、北側が140cmを測り、現長で3.9mある。溝底のレヴェルも南端が3.87m、中央部が3.72m、北端が3.78mで北にむかって低くなり、その傾斜に比例するように溝幅も広くなる。また、幅広になる北側の東壁には緩傾斜する壁面の途中に小さなフラット面を作る。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状をなす。溝中からは少量

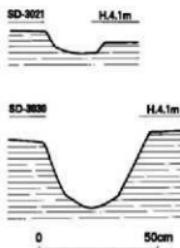


Fig. 79. 3021・3030号  
溝造構断面図 (1/20)

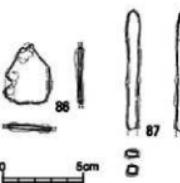


Fig. 80. 3002号土壙・3030号  
溝出土遺物実測図 (1/3)

の土師器や須恵器片が出土した。

87は現長が47.6cmの鉄鎌である。茎は5mmの方形で、鎌部は肉厚で刃部は幅狭。324は長さ4.3cm、重さが15gのSタイプの土鎌。

## 6 第4面の調査

第4面は、第3面の造構を掘り込んだ茶褐色砂層（第Ⅲ層）下で検出した最下層の造構面である。この造構面は、古砂丘の基盤層をなす黄白色砂層上にあり、標高は3.4～3.7mである。レヴェル的には北東側が高く、南西側が低くその比高差は30cmほどになる。これは祇園町交差点付近を最高所とし、南から南西方にむかって緩やかに傾斜していく古砂丘の地形と符合している。この造構面上の第Ⅲ層は基本的に茶褐色砂の単一層であるが、上層ほど茶色が濃くなる。併せて上層では、下層では出土しない奈良時代以降の新しい造物を多く含むようになる。このことから第Ⅲ層の間には一定期の造構面の存在が想起されるが、明確な造構面としては検出できなかった。

第4面では、竪穴住居跡5棟と土壇16基、溝状遺構1条のほかに柱穴を検出した。竪穴住居跡は古墳時代初めのものであるが、うち1棟は遺物にも弥生後期の甕などが混在する。覆土もほかの4棟と明らかに異なる黒色砂であることから一群の住居跡群より古い可能性がある。このことは包含層や一部の遺構からも同期の遺物が出土していることから窺うことができるが、遺構としては検出されていない。土壇は第1面～3面とプラン的にも分布的にも同様の傾向を示しているが、全体的に密度としては稀薄になる傾向を示す。この中には状況的に墓壙の可能性



Fig. 81 第4面遺構配置圖 (1/150)



Fig. 82 第4面西側全景（北より）



Fig. 83 第4面東側全景（北より）

をもつものもある。

柱穴は上面の造構群と較べて遺物の出土しないものが多くなる。また、柱穴底に砾石を敷いたものは稀で、柱筋の並ぶものも確認できず、建物跡としてはまとまらなかった。

### 1) 穫穴住居跡 (S C)

竪穴住居跡はすべてで 5 棟を検出した。周辺の調査でも多数の竪穴住居跡が検出されており、砂丘上には密集した住居群が形成されていたと考えられる。住居跡のうち 1 棟 (SC-4022) の覆土は黒色砂土でほかの 4 棟の住居跡と明らかにことなる。同時に遺物も弥生後期の土器片が混在し、ほかのものより古くなる要素を含んでいる。本調査区の住居跡は、幅員が 12m の狭小な調査区と云う制約に加えて削平による消失で全容の完全なものはないが、プラン的には概ね方形プランを基本とし、規模的には比較的小さなもので特筆すべき大型の住居跡はない。また、主柱穴も 1 棟を除いて確認できなかつた。これは砂丘上に構築すると云う立地上の要因に制約されるものと考えられる。

4022号住居跡 S C - 4022 (Fig. 84・85・86)

調査区の中央部西寄りに位置する住居跡で、南西隅壁は4023号住居跡の北西壁を切っている。平面形は、長辺が 5.3m、短辺が 3.65m の長方形プランを呈し、北壁は東隅壁を除いて 1002 号井戸や 3002 号土壙に削平されている。深さが 35cm の壁面はやや急峻に立ち上がって箱形の断面形を呈するが、西壁には床面より 20cm の高さに小さなフラット面を作る 2 段掘りのいわゆるベッド状の造構を付設している。しかし、このフラット面は幅が 25 ~ 35cm と非常に狭く、ベッド状造構としての機能を果たしていたかは明らかではない。柱穴は床面上から直徑が 30 ~ 50cm の円形 ~ 楕円形プランになる 5 本を検出した。このうち主柱穴は床面の中央部を東西に並ぶ 2 本柱と考えられ、深さも 50cm としっかりした柱穴である。南西隅に掘られた柱穴には直徑が 16cm、東壁北側の柱穴には 18cm の柱痕が明瞭に残っていた。床面は平坦で、周溝は検出されなかった。また、南壁際の床面上には、砂粒の赤変が 30 ~ 50cm の弧状の範囲で確認され、炉跡としての機能も考えられ

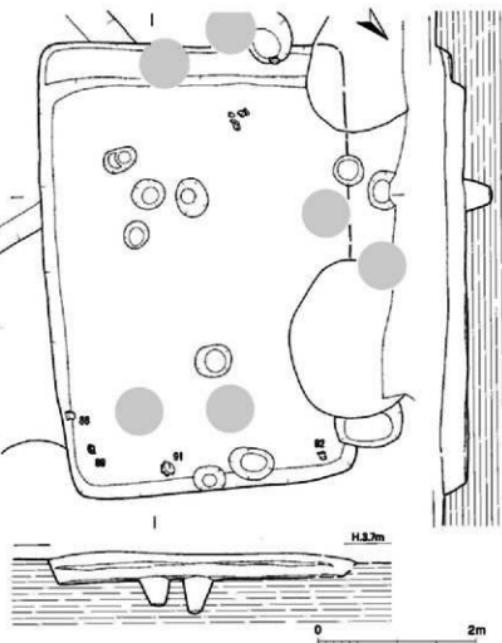


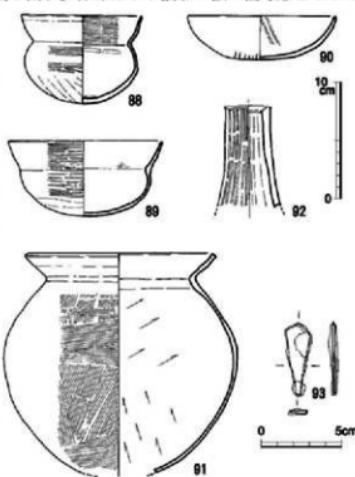
Fig. 84 4022号住居跡実測図 (1/60)



Fig. 85 4022号住居跡（西より）

る。覆土上層には弥生土器片や須恵器片が若干混入しているが、床面上からは古墳時代初めの土師器壺や丸底壺が出土している。

88・89は土師器の小型丸底壺である。88は口径が10.3cm、器高は7.5cm。外反する頸部は中ほどで屈曲して直口ぎみに立ち上がり、口縁端部は小さく摘み出す。体部はやや張りの強い偏球形をなしている。調整は頸部がハケ目、体部は外面がハケ目後に研磨。内面はケズリ後にナデ。89は口径13cm、器高は6.4cm。頸部は中位で緩やかに屈曲して外反し、体部は浅い偏球形をなす。調整は頸部内面がハケ目後にナデ、体部はヨコナデ。外面は頸部～体部上半がハケ目後に研磨、下半はヘラケズリ。いずれも胎土は精良で雲母を含み、焼成は堅緻。90は口径12.8cm、器高が3.8cmの丸底壺。半球形の体部内面はナデ後に研磨、外面はナデ。底部にはヘラ切り痕があり、淡黄褐色。91は口径が16.3cmの壺。外反する口縁部は端部を平坦に整えて外唇を小さく摘み出す。球形の胴部は外面がタテ～ヨコ方向のハケ目、内面はタテ～ナメ方向の粗いヘラケズリ。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。92は高环の脚である。外面は暗文状の研磨、内面は絞り痕。胎土には雲母を多く含み、黄褐色。93は鎌状の不明鉄器片。形状としては鎌形を呈するが、先端は刃部を形成せ

Fig. 86  
4022号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

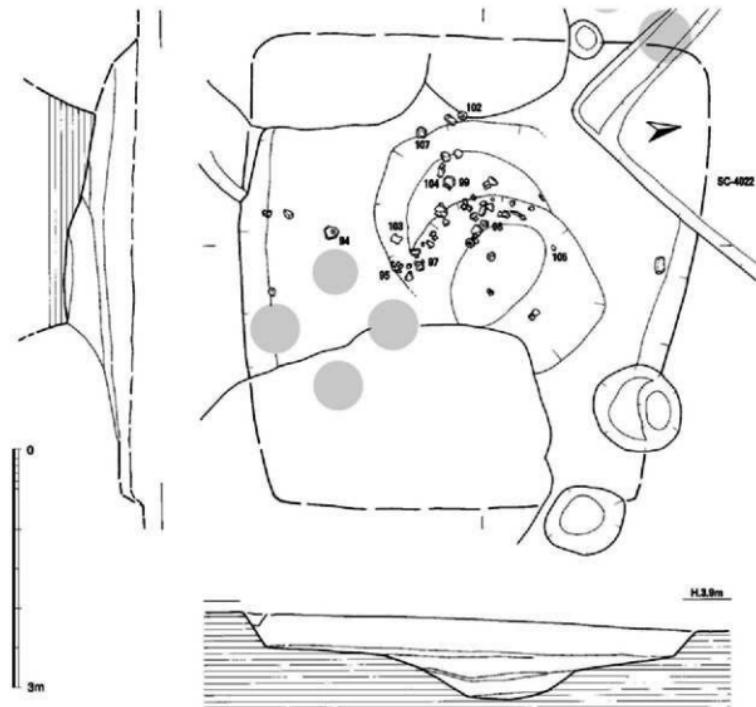


Fig. 87 4023号住居跡実測図 (1/60)

ず、形も非対称である。

現長は4.5cm。

4 0 2 3 号住居跡

S C - 4023

(Fig.87・88・89)

調査区の南西隅に位置する住居跡で、西壁側は4022号住居跡と2139・2141号井戸に、東壁は1032・1118号井戸に削平されているために全容は判然としない。遺存する南北壁から復原すると東西長は6m、



Fig. 88 4023号住居跡 (西より)

南北長は東壁側が4.3m、西壁側が5.6mの台形に近い長方形プランをなそうか。深さが35~50cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。床面の中央部には径190~240cm、深さ50cmほどの楕円形プランを呈する土壇状の掘り込みがある。床面は、この掘り込みにむかって緩やかに傾斜している。主柱穴は検出できなかった。これが緩傾斜する床面に因るものか砂上の覆土故かは判然としない。覆土は土壇状の造構を含む床面下層が黒褐色砂土になるが、基本的には黒色砂土の單一層である。この覆土はほかの4棟の住居跡と大きく異なり、時期的な差異と考えるのが妥当と云えよう。このことは土壇器の甕や丸底壺・高杯・器台に混じて弥生後期の甕や壺片が多く出土していることからも窺える。

94~96は平底の甕。94は底径が5cmの外底面もハケ目調整。96は口径18cm。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は短い倒卵形をなそう。調整は内外面とも粗いハケ目、胴部にはタタキ痕が残る。97

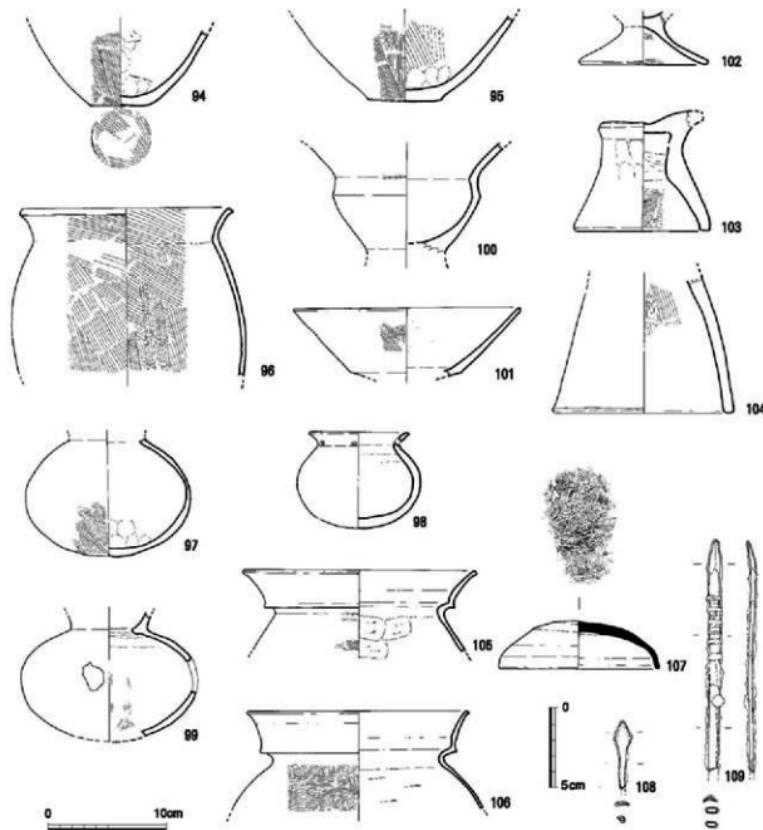


Fig. 89 4023号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/3)

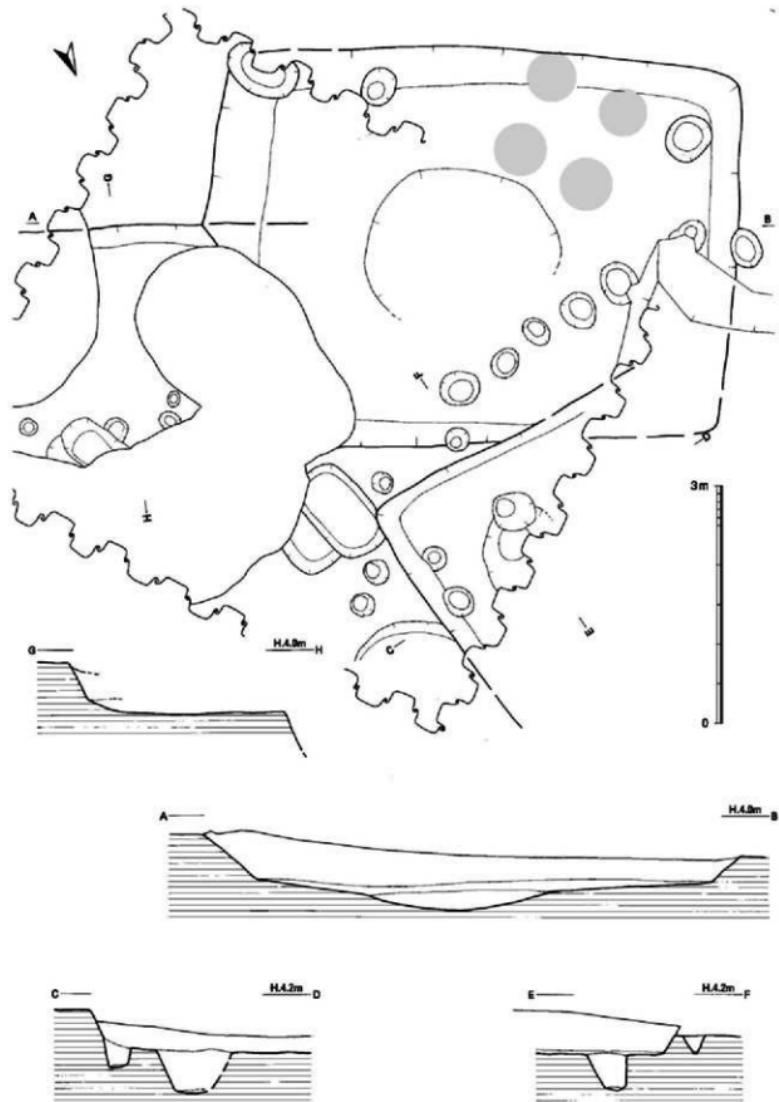


Fig. 90 4043・4044・4049号住居跡実測図 (1/60)

～99は小型丸底壺で、体部は張りの強い偏球形をなす。98は口径8.4cm、器高は8.2cm。口縁部は短く外反し、頸部との境には2孔一对の円孔が内から外へ焼成前に穿たれている。99は頸部から体部への屈曲面が内側へ舌状に強く張り出す。体部には焼成後の大きな穿孔がある。100は浅い台付鉢で、頸部は大きく外反する。外面は粗く研磨状のナデ調整。101は口径が19.2cmの高环で、4044号住居跡出土の高环片と接合した。ストレートに延びる口縁部の外面はタテヘナナメの細かいハケ目後に粗いヨコ研磨、内面は暗文状の粗いタテ研磨。102は脚径が11cmの器台の脚。脚裾は短くラッパ状に開き、外面は粗い研磨。103は底径11.6cm、器高が10.2cmの杏形容器台。嘴端部を欠き、天井部に円孔はない。外面は押正ナデ、内面はヨコナデ～ヨコハケ目。

105・106は二重口縁の土師器甕。105は口径19.8cm。口縁部は伸びやかに外反して端部を小さく擒み出す。106は口径が18.8cmで、口縁部は直口して立ち上がった後に小さく外反し、端部は下方に擒み出す。肩部内面はヘラケズリ、外面はハケ目で波状文を描く。108は口径13.6cm、器高4.1cmの須恵器环蓋。天井部には落書き様のヘラ記号がある。108は現存長が4.2cmの鉄鎌である。画面から研ぎ出した

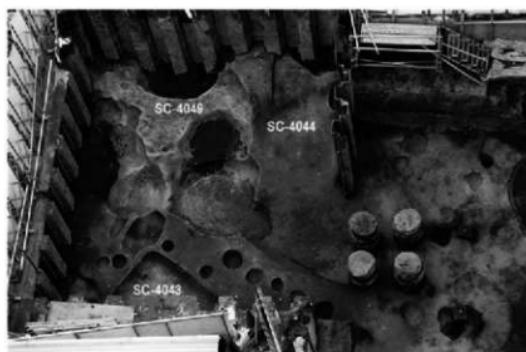


Fig. 91 4043・4044・4049号住居跡全景（北より）



Fig. 92 4043号住居跡（南より）



Fig. 93 4049号住居跡（北より）

刃部は鋭角的で、厚さ2mmの茎は細く断面形は長方形を呈する。109は現存長が14.5cm、身幅が6.8cmの鉢である。基部には2~3mmの幅で柄への系巻痕が残る。

4043号住居跡 S C -4043 (Fig. 90-92-94)

調査区の東縁に位置する住居跡であるが、南東隅壁を検出したのみで大半は調査区外に抜がり、全容は明らかでない。南壁は4044号住居跡の北壁と重複し、それよりも新しい。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は40~50cmを測る。覆土は茶褐色砂土で南壁際にある径が50~60cm、深さが45cmのピットが住穴の可能性がある。遺物は土師器の甕や丸底壺・高杯・器台のほかに須恵器や弥生土器の甕片がわずかに出土した。

110は口径が14cmの土師器甕。内窓ぎみに開く「く」字状口縁は端部を上方に小さく擒み上げている。球形の胴部は粗いハケ目調整で、上縁には緩やかな波状の横回線が巡る。胎土は粗砂粒と雲母を含み、黄褐色。114は口径が14.7cmの鉢。口縁部は短く「く」字状に外反し、半球形の体部上半は直線的に立ち上がる。外面は粗いハケ目、内面は粗い研磨仕上げ。

4044号住居跡 S C -4044 (Fig. 90・91・94・120)

調査区の東縁に位置する住居跡で、北東隅壁は搅乱を受けて消失している。平面形は長辺が6.65m、短辺が5.05mの長方形プランを呈する。深さが40~60cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。床面は緩やかな凹レンズ状をなし、中央部には直径が2~2.5m、深さが25cmほどの梢円形プランを呈する土壠状の窪みがある。プラン的に4023号住居跡と同じ形状を示すが主体を占める遺物や覆土には大きな違いがある。柱穴は南壁隅のひとつを除いて検出できなかった。茶褐色砂の覆土からは、土師器の甕や小型丸底壺・甕・高杯・器台のほかに須恵器甕・杯・弥生土器の甕・甕・丹塗り高杯・土鍤等が出土した。

112・113は土師器甕。短く「く」字状に外反する口縁部は外唇を小さく外傾ぎみに摘み出す。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。112は口径が16cm。肩部にはハケ目で波状文を描く。113は口

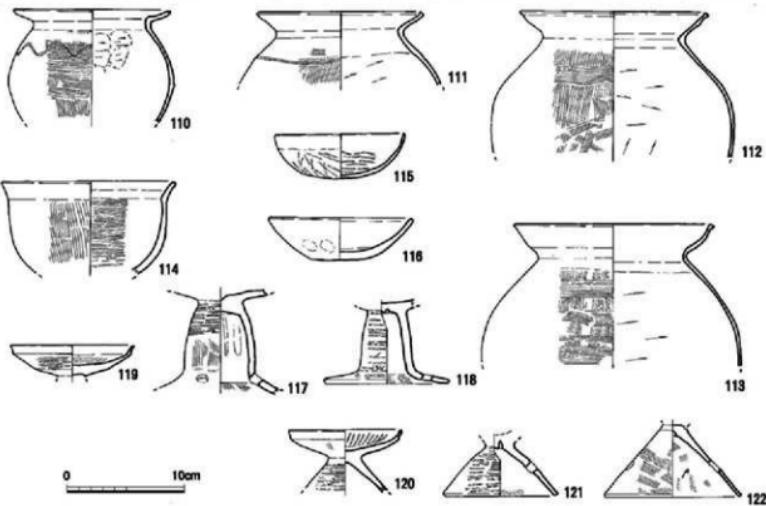


Fig. 94 4043・4044・4049号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

径が16.9cmで、口縁部は内窵ぎみに小さく膨らむ。115・116は鉢。115は口径が11cm、器高は3.8cm。半球形の体部は外面ともヨコナデ後に粗いヘラ研磨。胎土は精良で明黄灰色。116は口径12.2cm、器高は3.6cm。底部はヘラケズリで平底状をなし、体部は内窵ぎみに立ち上がる。117・118は高环の脚。内窵ぎみに膨らむ脚部は短く、外面はハケ目後に粗い研磨、内面はヘラケズリ。脚裾の屈曲部には円孔を穿つ。118は脚径が10.6cm。120～122は器台。120は口径が9.4cm。内窓する受け部は上縁が屈曲して稜を作り、口縁部は短く直口する。受け部内面は粗い放射状の研磨で摩擦による使用痕がある。121は脚径が9.9cmで外面はハケ目後にヨコ研磨。122は脚径が11.6cm。いずれも円孔を穿つ。349は径3.1cm、長さが7.2cm余のLタイプの土鍤。

#### 4049号住居跡 S C -4049 (Fig. 90・93・94)

調査区の南東端に位置する住居跡で、南壁の一部を残して4044号住居跡や攪乱壙に削平されて消失しており、全容は明らかでない。深さが45～60cmを測る壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は箱形をなす。床面は平坦で、4本の小柱穴があるが住居跡に伴うものか否かは判然としない。茶褐色砂土の覆土からは、土器甕や須恵器甕・坏のほかに弥生土器の甕片がわずかに出土している。

119は口径が10.3cmの器台である。内窵ぎみに立ち上がる受け部は上縁が大きく屈曲し、口縁部は短く直口する。調整は口縁部がヨコナデ、受け部内面は粗い放射状の研磨、外面はハケ目後にヨコ研磨。胎土は精良で砂粒を含み、焼成は良好。色調は明灰褐色を呈する。

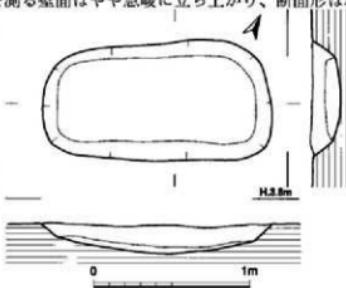


Fig. 95 4002号土壤実測図 (1/30)



Fig. 96 4002号土壤 (南より)

## 2) 土 壤 (SK)

第4面では、全城で15基の土壤を検出した。プラン的には長方形のものと円～椭円形のものに大別されるが、円～椭円形プランのものが多くを占める。また、長方形プランのものは形状的に墓壙の可能性を想起させるものがあるが、根拠的には稀薄である。一方、分布的には、円～椭円形プランのものは調査区の中央部に比較的まとまった抜かりを示すが、長方形プランのものは散逸的な在り方を示している。

4002号土壤 SK-4002 (Fig. 95・96)

調査区の北東端に位置する東西軸の土壤で、すぐ東には4022号住居跡がある。平面形は長辺が144cm、短辺が76cmの隅丸長方形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は10cm。凹レンズ状に浅く窪む壙央までの深さは19cmを測る。断面形は浅い舟底状をなし、墓壙の可能性が想起される。覆土は淡い黒茶褐色砂で黄白色砂がブロック状に混入している。土師器片や須恵器甕・坏片がわずかに出土した。

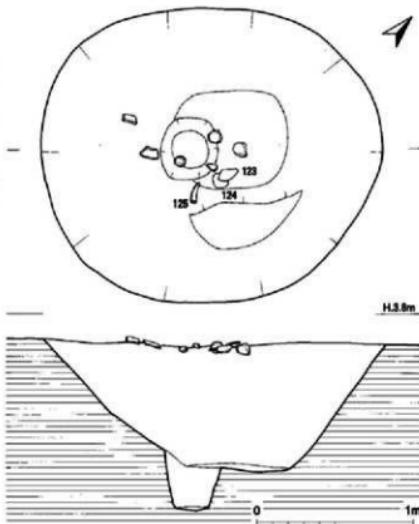


Fig. 97 4003号土壤実測図 (1/30)



Fig. 98 4003号土壤 (南より)

#### 4003号土壤 SK-4003 (Fig. 97・98・99・120)

調査区の中央部に位置する大型の土壤で、4022号住居跡の南東隅壁を切っている。平面形は長辺が216cm、短辺が187cmの円形プランを呈する。壇底は63~70cmの平坦な円形を呈し、西壁際に直径が37cm、深さが28cmのピットが掘り込まれている。深さが80cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土は上層に10~15cmの厚さで暗茶褐色砂が凹レンズ状に堆積し、その下層には淡茶褐色砂が壇底まで厚く堆積していた。検出面からは鉄鎌をはじめ須恵器環や环蓋、土師器甕などが比較的まとまって出土した。

123は口径が21cmの須恵器環である。天井部には扁平なボタン状の摘みが付く。口縁部は強く屈曲して短く外反し、水平な端部は小さく外方に摘み出す。調整は天井部がヘラケザリ、Fig. 99 4003号土壤出土遺物実測図(1/4・1/3) 内面には円く光沢のある灰釉がかかる。124は口径18.6cm、器高5.6cm、高台径が12.6cmの須恵器環である。ストレートに外反する体部はヨコナデ、内底面はナデ調整。高台の豊付は水平で、外唇を小さく摘み出す。胎土は精良で微細砂を含む。外面は濃灰色、内面は淡明灰色。125は長さが13.5cm、身幅が1.8cmの鉄鎌で、刃部は緩やかに内弯する。基部は直角に折り曲げている。

#### 4018号土壤 SK-4018 (Fig. 100)

調査区の南西縁にある南北軸の小土壤で、西壁は4031号土壤に削平される。平面形は長辺が120cm、短辺が70cmの隅丸長方形プランをなす。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは20cmであるが、北壁側はさらに50cm余り掘り込んだ2段掘りの構造をなす。遺物は布留式の甕片と須恵器甕片が出土した。

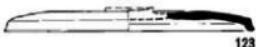
#### 4031号土壤 SK-4031 (Fig. 81・101)

調査区の南端に位置する大型の土壤で、西~南壁は1032・1118号井戸に削平されて全容は不詳。平面形は長辺が175cmほどの横円形プランにならう。深さが25~30cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。土師器甕と須恵器環の小片が出土した。

126・127は口径が14.5cmの丸底の土師器環である。体部は内弯ぎみに立ち上がり、板目圧痕がある。126の体部は扁平な半球形で、器高が3cm。127は器高が3.8cm。胎土は良質で淡黄褐色。

#### 4033号土壤 SK-4033 (Fig. 102・103)

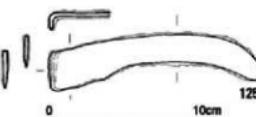
調査区の中央部西寄りにあり、4023号住居跡の北壁上に掘り込んでいる。平面形は直径が110cmの円形プランを呈する。土壤は南壁側を検出面から25cmほど掘り下げ、その後北壁に沿って更に15cm掘り下げた2段掘りの構造をなす。壇底は30cm×50cmの楕円形プランで、1段目のフラット面は壇底を取り巻くように半月形を呈している。遺物は土師器甕のほかに須恵器甕片が出土した。



123



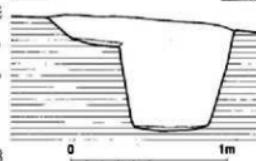
0 10cm



125

Fig. 99 4003号土壤出土遺物実測図  
(1/4・1/3)

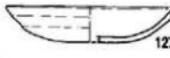
H.3.6m



0 1m



127



0 10cm

Fig. 101 4030・4031号土壤  
出土遺物実測図 (1/4)

356は長さが3cm、重さが7gのSタイプの土錘である。

4036号土壤 SK-4036 (Fig. 105)

調査区の中央部に位置し、すぐ北には4003号土壤がある。南小口壁は不整形土壤によって削平されている。平面形は長辺が125cm、短辺が80cmの隅丸長方形プランを呈する。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は15cm。壇底は平坦であるが、中央部は1段低くなる。断面形は箱形をなす。プラン的に見て墓壇の可能性も考えられる。覆土は暗灰茶褐色砂土で、土師器甕小片が出土した。

4039号土壤 SK-4039 (Fig. 105)

調査区の中央部にある小土壤で、北には4003号土壤、西には4036号土壤が隣接している。平面形は長辺が100cm、短辺が82cmの隅丸方形プランを呈し、壁高は10cmである。壁面は緩やかに立ち上がる。壇底は平坦で、断面形は逆台形をなす。覆土は濃灰茶褐色砂の單一層である。

4042号土壤 SK-4042 (Fig. 106・107)

調査区の北東縁に位置する土壤で、北西隔壁は4043号住居跡の東壁に、南東隔壁は搅乱壇によって削平されている。平面形は長辺が128cm、短辺が75cmを測る隅丸長方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は30cmを測る。壇底は北小口側が浅く凹レンズ状に窪み、断面形は逆台形をなす。形状的に墓壇の可能性も考えられる。濃い茶褐色砂土の覆土中からは、土師器甕や器台、須恵器環のほかに弥生土器の甕片が出土している。

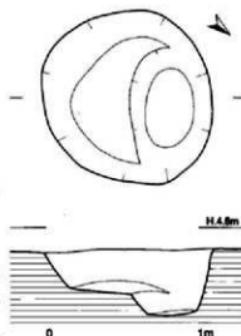


Fig. 102  
4033号土壤実測図 (1/30)



Fig. 103 4033号土壤 (東より)

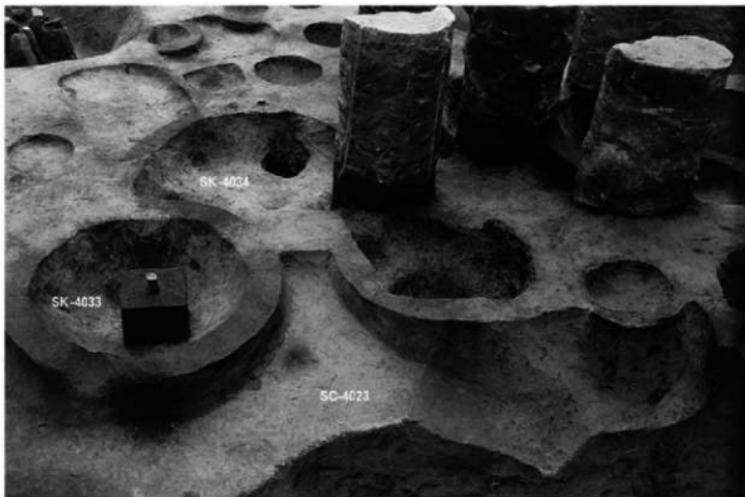


Fig. 104 4033・4034号土壙（西より）

#### 4054号土壙 SK-4054 (Fig. 108)

調査区の中央部北端に位置する大型の土壙で、南壁は4065土壙の北壁と重複し、新しい。平面形は長辺が210cm、短辺が200cmの不整な円形プランを呈する。壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形。壁高は15~20cm。平坦な壙底の東壁際には45×70cmを測る梢円形プランの小ピットがある。覆土は暗茶褐色砂で、土師器と須恵器の小片が出土した。

#### 4059号土壙 SK-4059 (Fig. 109・110)

調査区北部の東寄りに位置する土壙で、すぐ西には4069号土壙が隣接している。平面形は長辺が160cmの梢円形プランをなし、短辺は120cmほどにならうか。土壙ははじめに標高3.25m、検出面より30cmの深さまで掘り込んだ後、更に南壁に沿って30cm掘り込んだいわゆる2段掘りの構造をなしている。壙底の標高は2.96m。壙底は浅い凹レンズ状をなし、1段目のフラット面は壙底にむかって緩やかに傾斜している。壙底の平面形は28×43cmの梢円形プランで、土壙の検出プランを縮尺した形状をしている。覆土は濃い灰茶褐色砂土で、土師器甕・鉢・須恵器甕・壙片のほかに弥生土器の粒片も出土している。

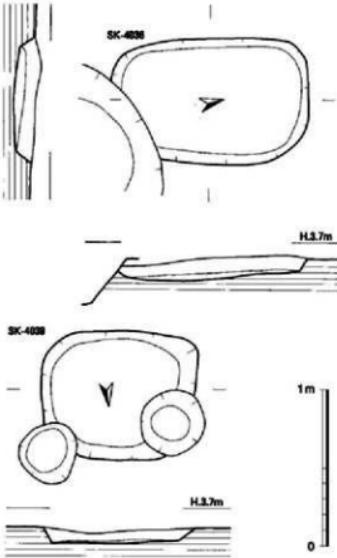


Fig. 105 4036・4039号土壙実測図 (1/30)

## 4065号土壤 SK-4065 (Fig. 81)

調査区中央部の北部に位置する土壤である。北～東壁は大きな4054号土壤の南壁で削平されているため全容は明らかでないが、平面形は長辺が180cm、短辺が130cmほどの長方形プランをなそう。壁面はやや急峻で、断面形は箱形をなす。覆土は暗茶褐色砂で、土師器小片が出土している。

## 4069号土壤 SK-4069 (Fig. 110・111)

調査区の中央部に位置する南北軸の土壤で、北東には4059号土壤が、北西には4054号土壤が隣接している。平面形は長辺が222cm、短辺が97cmを測る隅丸長方形プランを呈する。深さが15cmの壁面はやや急峻に立ち上がり、箱形の断面形をなしている。壇底は平坦であるが、南小口壁側が浅く凹レンズ状に窪む。覆土は濃い茶褐色砂土で、状況的に墓壇の可能性が強く示唆される。土師器甕や高环のほかに須恵器片が出土した。

## 4077号土壤 SK-4077 (Fig. 81)

調査区の中央部南寄りにあり、北には4044号住居跡が隣接している。平面形は長辺が155cm、短辺が110cmの不整形な梢円形プランを呈す。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い逆台形。壁高は11～17cm。覆土は暗灰茶褐色砂の單一層で、土師器と須恵器の甕片が

## 4078号土壤 SK-4078 (Fig. 81)

調査区の中央部に位置する大型の土壤で、北には4059号土壤と4069号土壤が並んでいる。平面形は長辺が185cmで短辺は西壁が100cm、東壁が30cmの卵形状のプランを呈する。深さが11～15cmの浅い壁面は急峻に立ち上がり、断面形は箱形をなす。覆土は暗茶褐色砂の單一層で、土師器甕の小片が

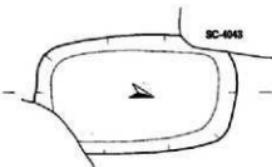


Fig. 106 4042号土壤実測図 (1/30)



Fig. 107 4042号土壤 (西より)

わずかに出土している。

#### 4080号土壤 SK-4080 (Fig. 81)

調査区の中央部南辺にある円形プランの土壤で、4077号土壤が北に隣接している。土壤の南壁は調査区外に、西壁は2130号井戸に削平されて全容は明らかでない。壁面は緩やかに立ち上がる。壇底は平坦で、逆台形の断面形をなすが、壁高は10cmと浅い。覆土は濃灰茶褐色砂で、布留式瓦片が出土している。

#### 7. 包含層出土の遺物 (Fig. 113~120)

第1面から第4面とした造構検出面の間には弥生時代から中世までの遺物を包蔵する遺物包含層が厚く堆積しており、各造構面間の遺物包含層を便宜的に上層から第I層、第II層、第III層とした。これらの造構面や遺物包含層からは中国陶器や土師器、須恵器、瓦器のほか土製品や石製品、鉄器など各時代の多種多様な遺物が出土した。しかしながら、時間的な制約等から十分に検討を加えて図化し、詳述することができなかった。ここでは各造構面と包含層から出土した主な遺物を列挙して、ひとつの参考としておきたい。

133~168は第1面の造構面と第I層から出土したものである。133~137は口径が7.6~9.8cm、器高は1.2~1.5cmの土師器小皿である。底部はヘラ切り、回転糸切り後に板目圧痕が付く。138~143は土師器環である。体部は平底の底部からストレートに外反する。口径が12.5~14.5cm (138~142) のものとやや大きい17.8cm (143) のものがある。144~153は白磁皿である。146・151は口径10~10.8cm を測る高台付のII類。144・145・149~150は口径が10.2~10.4cm、器高が2.4~2.7cmのIII類。147・148は口縁部端を小さく摘み出す端返りのIV類で、口径は10.4cm、器高は2~2.5cm。152・153は見込みに片切彫りで劃文花文を描く。153はIV類。152は口径10cm、器高は2.3cm。154~156は青磁皿。見込みには片切彫りと櫛描で劃文花文を施文する。154は龍泉窯。155・156は同安窯。157は高台付の青磁皿。158~163は白磁碗である。160~161は端返りの碗。60は口径が16cmで、見込みに櫛描文と圓線を描く。161は口径10cm、器高は6.2cmで体部に2条の圓線を描く。158・159・162は玉縁口縁の碗。158・159はIV類。162は口径17.2cm。163は口径16.6cm。内面に櫛描文があり、口ハゲ。166は越州窯系青磁碗。見込みは蛇の目動剥ぎで体部にはヘラと櫛描きで施文。165は漆黒色釉の天目碗で、墨書痕がある。164はB群陶器皿で、口径9.2cm、器高は3.8cm。167・168は鉄鋤車。167は土製、168は滑石製。

169~181は第II層から出土した。169~173は土師器小皿で底部はヘラ切りか糸切り後に板目圧痕が付く。口径が8.4~9cm (169~172) のものと11cm (173) のものがある。174は口径12.6cm土師器環。175は高台径が16cmの环。176は口径10.8cm、器高が3.8cmの須恵器环である。天井部には薄いボタン状の摘みが付き、ヘラ記号を刻む。177は口径14.2cm、器高5.9cmの須恵器环。高台は短く外反する。178・179は須恵器高环の脚。180は

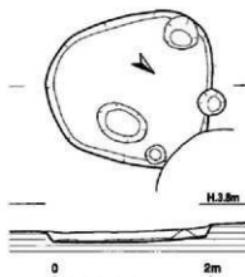


Fig. 108 4054号土壤実測図 (1/60)

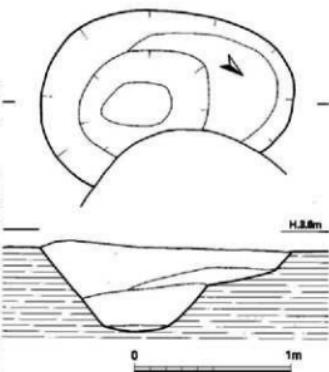


Fig. 109 4059号土壤実測図 (1/30)

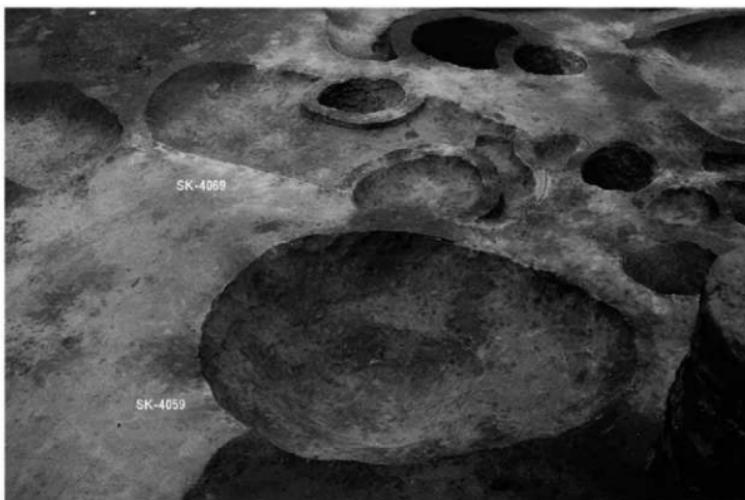


Fig. 110 4059・4069号土壙（北より）

口径16.6cmの内黒瓦器塊。口縁部～内面は粗い研磨。181はIV類の玉縁口縁の白磁碗。口径は17.4cm。132は和銅開跡。

182～207は第III層から出土した。182・183は土師器器台。受け部は短く外反する。184は口径11cmの丸底壺。口縁部は球形の体部から屈曲して短く「く」字状に外反する。185は口径17.4cm、器高19cmの土師器壺。胴部は肩の振らない球形で、口縁部は小さく外反する。186は口径11.6cm、器高2.1cmの高台付皿。187～189は土師器坏。189は径11.8cmの高台が付く。190～194はボタン状の扁平な摘みが付く須恵器环蓋。194は口径が26.8cmの大形品。195は返りが鋭角的に内傾する須恵器坏。196・197は須恵器皿。198は須恵器壺で、胴部下半に3条の横凹線が巡る。199・200は瓦器塊。体部は粗い研磨。201は鉄鎌で、茎には矢柄の装着痕がある。202・203は板状の不明鉄器。204は鉄鎌の基部か。205は無飾の刀装具。206は銅芯金鍍金の耳環で、内径が1.32cm。207は闇のなだらかな刃部先端を欠いた刀子。

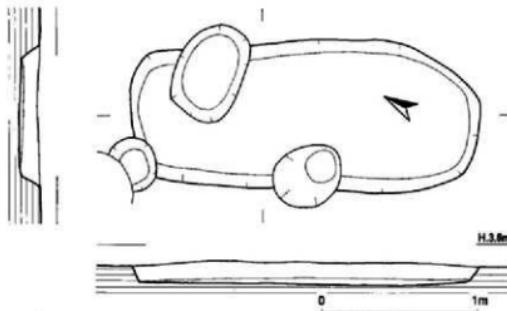


Fig. 111 4069号土壙実測図（1/30）

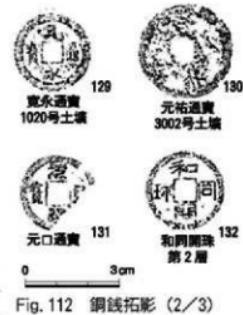


Fig. 112 銅錢拓影（2/3）

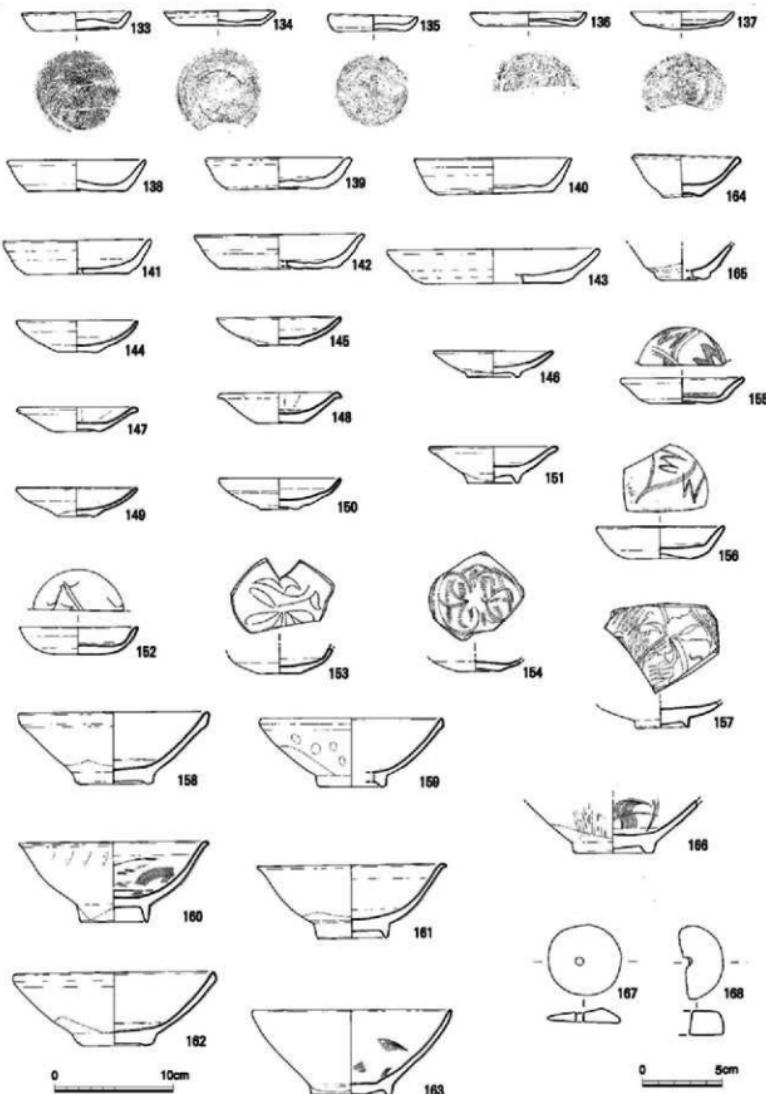


Fig. 113 包含層出土遺物実測図 1 (1/4・1/3)

### III. おわりに

第156次調査では、古墳時代初めから中世の初めまでの遺構や遺物を検出した。その成果については、準備不足と時間的な制約から十分な検討ができず、調査担当者の責務を全うしたとは言い難い。ここでは幾つかの点について簡単に整理して今後の課題とした。

本調査では、古墳時代初めと古代から中世初めまでの4面の遺構面を検出した。時期的には第1面が13世紀代。第2面が12世紀後半～13世紀代。第3面は12世紀前半～後半代。第4面は4世紀前半の年代観が与えられる。このうち第4面の遺構面には8世紀代の遺構も含まれる。この遺構群の上層には厚い茶褐色砂が堆積している。遺構はこのレヴェルから掘り込まれたものが、そのプランを明確に捉えることができずに第4面で検出したものである。

古墳時代の遺構は4世紀の堅穴住居跡からなる集落跡である。堅穴住居跡のうち1棟の覆土は他の住居跡と大きく異なり、前時代の遺構のものに近い。出土した遺物からもそれが窺える。西方の第147次調査では弥生時代の壇墓群が検出されており、同期の遺構が近在する可能性も否定できない。北に隣接する第50次調査で検出された6世紀代の住居跡は、未検出であるが土器や鉄器などの遺物は出土しており、遺構があっても不自然ではない。周辺の調査でも同期の住居跡は検出されており、砂丘全体に括がっている。本調査区での未検出が、集落の隙間域に起因する故かは今後の検討次第である。また、第3層上で小石室状の石組遺構を検出した。遺物が伴っていないので、明確な時期は特定できないが古墳時代後期のものと考えて差し支えないであろう。周辺域で集落跡が括がっている中にあって、この種の遺構が単基であることが何を意味するかは検討の余地があろう。

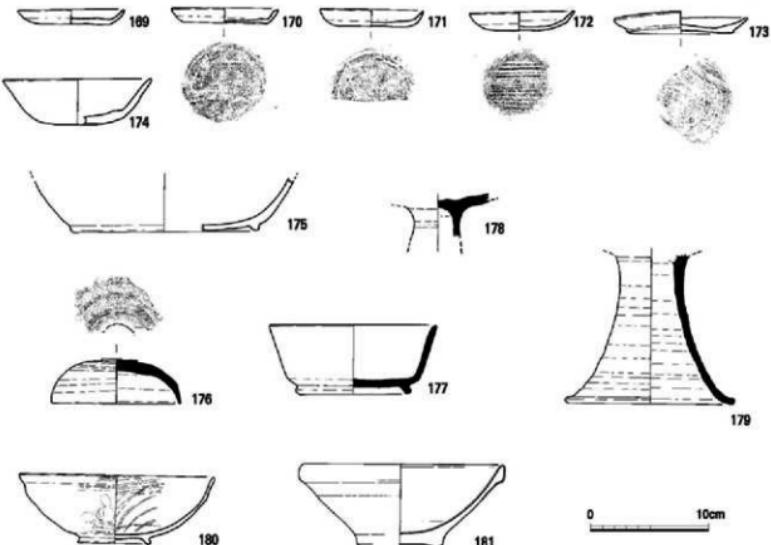


Fig. 114 包含層出土遺物実測図 2 (1/4)

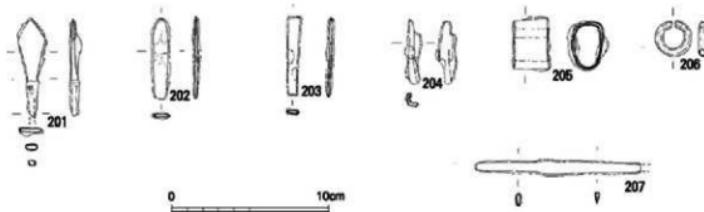
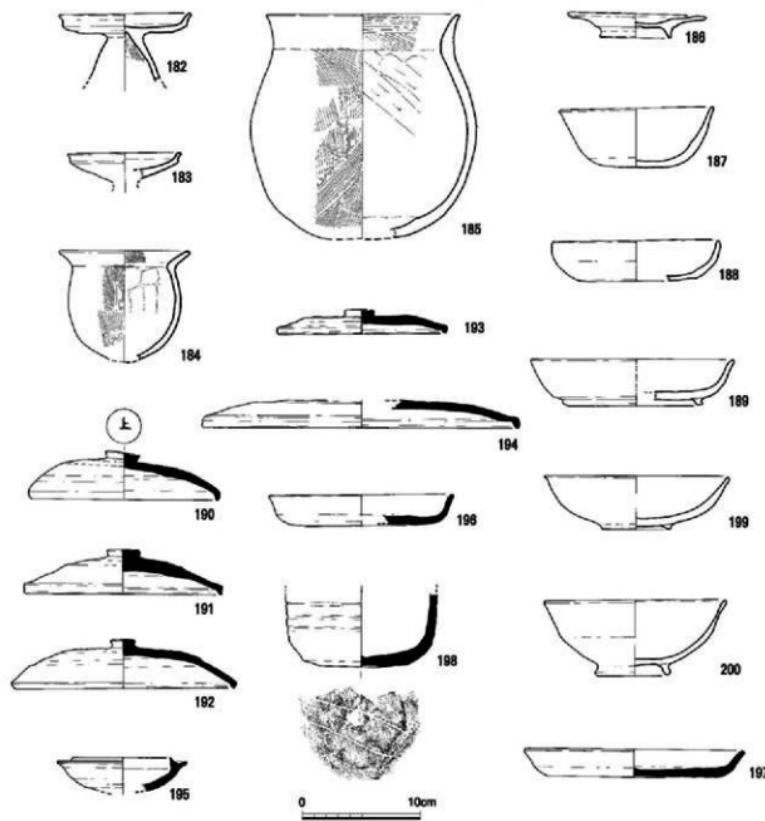


Fig. 115 包含層出土遺物実測図 3 (1/4・1/3)

遺物No.	出土遺構	法量(長×最大径cm)	重さ(g)	タイプ	Fig.	備考
208	SK-1001	5.7+α×1.9	17	M	116	
209	SK-1132	3.7×1.6	11	S	116	
210	SE-1002	4.6×1.2	7	S	116	細身、把方
211	SE-1032	5.0×1.7	12	S	116	把方上層
212	SE-1118	4.2×1.4	6	S	116	
213	SE-1118	7.2×1.8	14	L	116	
214	SE-1171	4.7×1.6	10	S	116	
215	SP-1025	3.5×1.5	8	S	116	
216	SP-1029	3.2+α×1.2	3	S	116	半欠
217	SP-1101	3.2×2.3	13	S	116	
218	第1層	6.3+α×2.4	34	L	116	
219	第1層	4.0+α×1.8	8	M	116	半欠
220	第1層	3.5×1.7	8	S	116	
221	第1層	4.0×1.8	13	S	116	
222	第1層	3.0×1.5	5	S	116	
223	第1層	3.0×1.6	7	S	116	
224	第1層	4.0×1.8	10	S	116	
225	第1層	4.0+α×2.2	19	S	116	
226	第1層	4.3×1.6	11	S	116	
227	第1層	4.5×1.3	7	S	116	細身
228	SK-2004	3.7+α×1.8	12	S	116	
229	SK-2094	4.0+α×1.5	7	S	116	
230	SK-2124	3.0×1.4	5	S	116	
231	SK-2131	6.3×2.5	33	L	116	
232	SK-2131	3.8+α×1.5	10	S	116	
233	SK-2131	4.7+α×1.7	11	M	116	
234	SK-2136	3.7+α×1.4	7	S	116	
235	SK-2144	4.0+α×1.6	9	S	116	
236	SK-2145	4.7×1.8	13	S	116	
237	SK-2147	3.9×1.7	12	S	116	
238	SK-2184	4.6+α×3.0	36	L	116	半欠
239	SK-2186	4.1×1.6	11	S	116	
240	SK-2217	3.2+α×1.6	7	S	116	半欠
241	SK-2218	3.3×1.2	5	S	116	
242	SE-2118	6.0+α×1.8	15	L	117	
243	SE-2118	6.0+α×1.6	17	M	117	
244	SE-2118	6.0+α×2.2	26	M	117	
245	SE-2130	3.7+α×1.8	10	S	117	
246	SE-2130	4.2+α×1.6	10	S	117	
247	SE-2130	5.8×2.0	24	M	117	
248	SE-2131	3.5+α×1.5	7	S	117	
249	SE-2141	5.0×2.3	26	L	117	半欠
250	SE-2142	4.7+α×1.7	10	S	117	
251	SE-2148	5.0+α×2.0	15	M	117	
252	SP-2024	2.2×1.5	4	S	117	
253	SP-2024	3.6+α×1.5	6	S	117	
254	SP-2035	3.7+α×1.5	6	S	117	
255	SP-2065	3.6+α×1.8	10	S	117	
256	SP-2097	5.5×3.0	52	S	117	黒色
257	SP-2114	3.7×1.7	13	S	117	
258	SP-2121	3.6+α×1.8+α	8	S	117	
259	SP-2133	6.4+α×1.8	18	L	117	
260	SP-2138	5.0+α×1.2	8	M	117	
261	SP-2149	3.0+α×1.2	6	S	117	
262	SP-2183	5.0×1.8	11	S	117	細身

Tab. 1 土鍬計測表 1

遺物No.	出土遺構	法量(長×最大径cm)	重さ(g)	タイプ	Fig.	備考
263	SP-2190	3.0×1.5	6	S	117	
264	SP-2221	4.3×2.0	14	S	117	
265	SP-2238	2.8×1.6	6	S	117	
266	第2層	3.4×1.5	6	S	117	
267	第2層	3.4×1.5	7	S	117	
268	第2層	3.0×1.6	7	S	117	
269	第2層	3.2+α×1.5	7	S	117	
270	第2層	3.7×1.6	8	S	117	
271	第2層	3.7×1.6	10	S	117	
272	第2層	4.4×1.5	8	S	117	
273	第2層	3.4×1.5	7	S	117	
274	第2層	2.8×1.8	9	S	117	有溝
275	第2層	3.5+α×1.9	8	S	117	
276	第2層	2.8×2.0	9	S	117	
277	第2層	3.4×2.2	14	S	118	
278	第2層	4.0+α×2.0	11	M	118	半欠
279	第2層	4.0+α×1.5	6	S	118	
280	第2層	4.6+α×1.8	8	S	118	
281	第2層	4.7×1.5	5	S	118	
282	第2層	5.0+α×1.5	5	M	118	
283	第2層	5.4+1.0	4	S	118	細身
284	第2層	6.5+α×1.3	7	L	118	細身
285	第2層	6.1+α×1.5	11	L	118	
286	第2層	4.8×1.3	7	S	118	
287	第2層	4.5+α×1.6	9	S	118	
288	第2層	4.3+α×1.8	10	S	118	
289	第2層	3.8×2.0	11	S	118	
290	第2層	6.0×1.7	13	S	118	
291	第2層	4.7×1.8	13	S	118	
292	第2層	4.0+α×2.0	12	M	118	半欠
293	第2層	4.8+α×2.0	15	M	118	半欠
294	第2層	4.5×2.5	24	S	118	
295	第2層	5.8+α×2.0+α	12	M	118	
296	第2層	6.3+α×1.5	13	L	118	
297	第2層	7.0+α×2.0	25	L	118	
298	第2層	6.5×2.0	23	L	118	
299	第2層	7.0×2.2	31	L	118	
300	第2層	6.8+α×2.0	25	L	118	
301	第2層	7.5+α×2.0	26	L	118	
302	第2層	5.8×2.2	31	L	118	
303	第2層	6.4×2.5	33	L	118	
304	第2層	6.8×2.5	31	L	118	
305	第2層	7.0×2.5	40	L	118	
306	第2層	5.0×2.8	43	S	118	
307	第2層	5.0×3.0	45	S	118	有溝
308	第2層	7.5+α×3.0	66	L	118	
309	第2層	6.5×3.8	108	L	118	
310	SK-3001	3.7×1.7	9	S	119	
311	SK-3002	4.2×1.2	6	S	119	
312	SK-3002	3.6×1.4	6	S	119	
313	SK-3002	3.8+α×1.8	8	S	119	半欠
314	SK-3041	4.7+α×1.6	10	S	119	
315	SK-3060	6.0×2.1	19	M	119	
316	SK-3060	4.0×1.5	7	S	119	
317	SK-3067	5.5×1.6	14	S	119	

Tab. 2 土縫計測表2

遺物No.	出土遺構	法量(長×最大径cm)	重さ(g)	タイプ	Fig.	備考
318	SK-3067	6.2+α×2.1+α	14	L	119	半欠
319	SK-3074	5.6+α×2.1	18	L	119	
320	SK-3074	5.9×1.7	17	M	119	
321	SK-3074	6.0×1.2	9	M	119	細身
322	SK-3074	5.0+α×1.8+α	13	L	119	半欠
323	SP-3052	3.6+α×1.8	9	S	119	
324	SD-3030	4.3×2.0	15	S	119	
325	第3層	5.8+α×1.2	7	M	119	細身
326	第3層	4.5×1.5	8	S	119	
327	第3層	5.5+α×1.5	11	M	119	
328	第3層	4.0×2.0	13	S	119	
329	第3層	4.0+α×2.0	11	S	119	半欠
330	第3層	5.0+α×2.0	15	M	119	
331	第3層	5.7×2.1	20	M	119	
332	第3層	5.5×2.0	20	S	119	
333	第3層	6.0+α×2.2	26	L	119	
334	第3層	7.0×2.0	23	L	119	
335	第3層	7.5×2.2	28	L	119	
336	第3層	7.3×3.0	66	L	119	
337	第3層	4.3×1.4	6	S	119	下層
338	第3層	4.0×1.5	7	S	119	下層
339	第3層	3.7×1.3	6	S	119	下層
340	第3層	5.2×1.5	11	S	119	下層
341	第3層	4.8+α×2.0	15	M	119	下層
342	第3層	5.3+α×2.0	16	M	119	下層
343	第3層	6.0+α×1.8	17	M	120	下層
344	第3層	7.6×2.0	29	L	120	下層
345	第3層	6.5×2.5	42	L	120	下層
346	第3層	7.0+α×2.8	44	L	120	振痕、下層
347	第3層	8.5+α×3.0	60	L	120	下層
348	第3層	9.0×2.5	44	L	120	下層
349	SC-4044	7.2+α×3.1	75	L	120	
350	SK-4002	3.2×1.5	7	S	120	
351	SK-4003	5.1×1.7	11	M	120	半欠
352	SK-4003	6.4×2.5	33	L	120	
353	SK-4003	7.0×1.9	25	L	120	
354	SK-4003	6.7×1.9	21	L	120	
355	SK-4003	5.8×2.7	37	M	120	
356	SK-4033	3.0×1.8	7	S	120	半欠
357	SP-4029	4.0+α×1.8	12	S	120	半欠
358	SP-4029	3.0+α×2.0	8	S	120	半欠
359	包含層	3.4+α×1.2	6	S	120	
360	包含層	3.2+α×1.3	4	S	120	
361	包含層	3.4+α×1.5	6	S	120	
362	包含層	3.7+α×1.9	10	S	120	
363	包含層	4.5+α×1.5	8	S	120	
364	包含層	4.7×1.4	8	S	120	
365	包含層	4.3×1.8	13	S	120	
366	包含層	4.5×1.8	13	S	120	
367	包含層	5.5+α×1.8	14	M	120	
368	包含層	6.2+α×1.5	15	L	120	
369	包含層	6.5+α×2.2	25	L	120	
370	包含層	5.5×2.9	53	S	120	

Tab. 3 土鐘計測表3



Fig. 116 出土土錘 1 (縮尺不同)

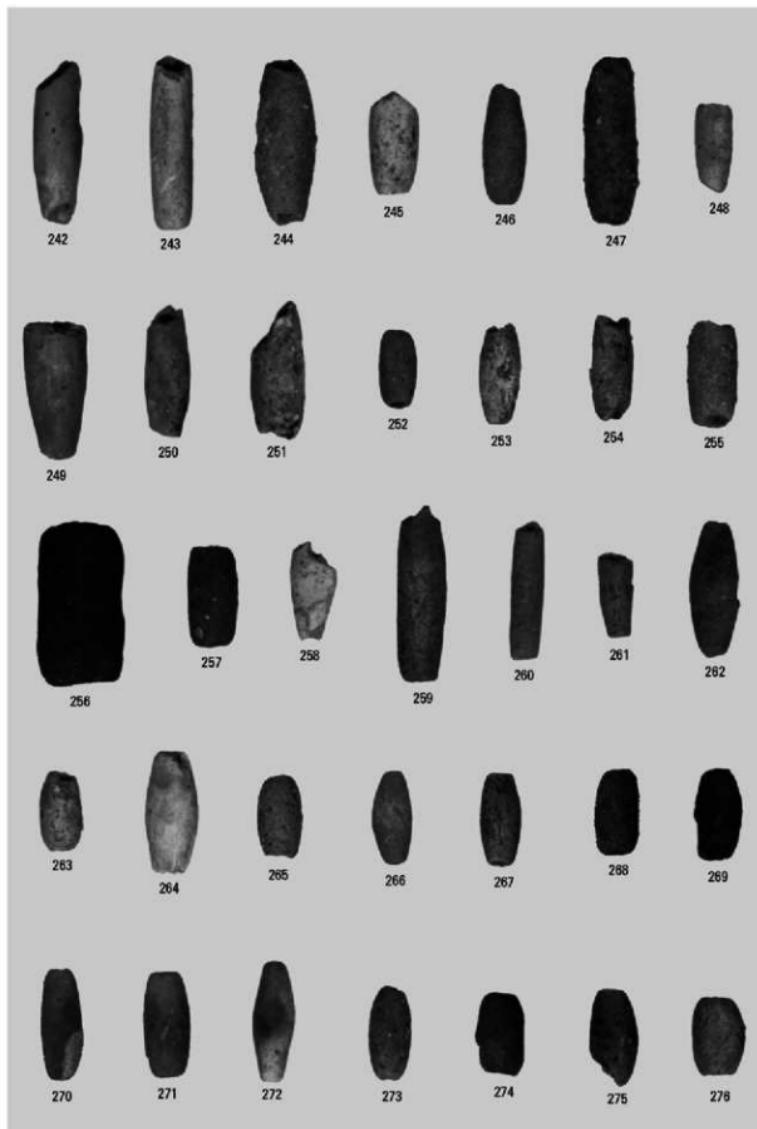


Fig. 117 出土土錘 2 (縮尺不同)



Fig. 118 出土土鍤 3 (縮尺不同)

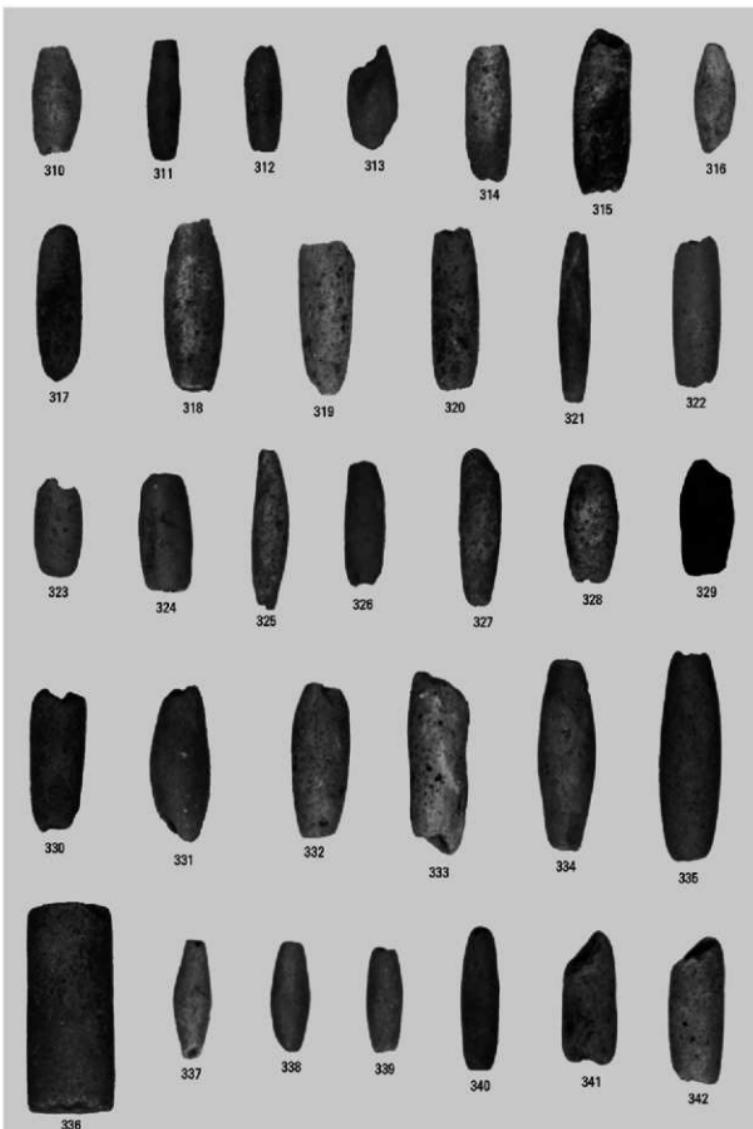


Fig. 119 出土土鐘 4 (縮尺不同)



Fig. 120 出土土鐘 5 (縮尺不同)

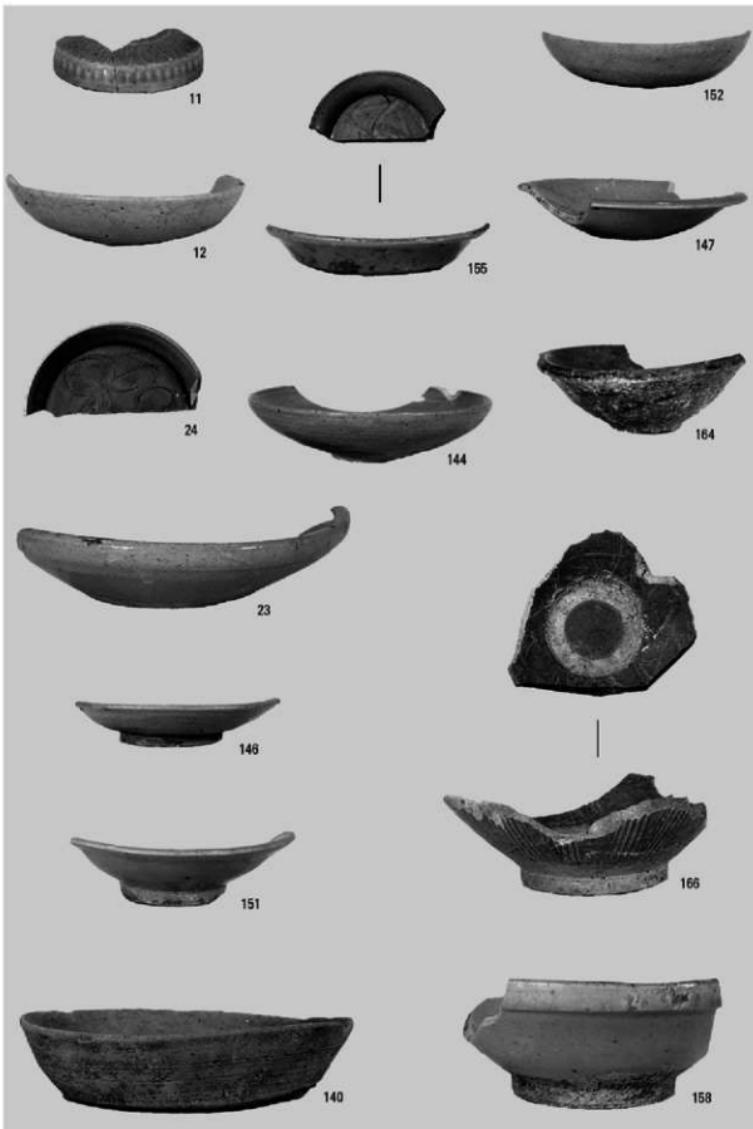


Fig. 121 出土遺物 1 (縮尺不同)

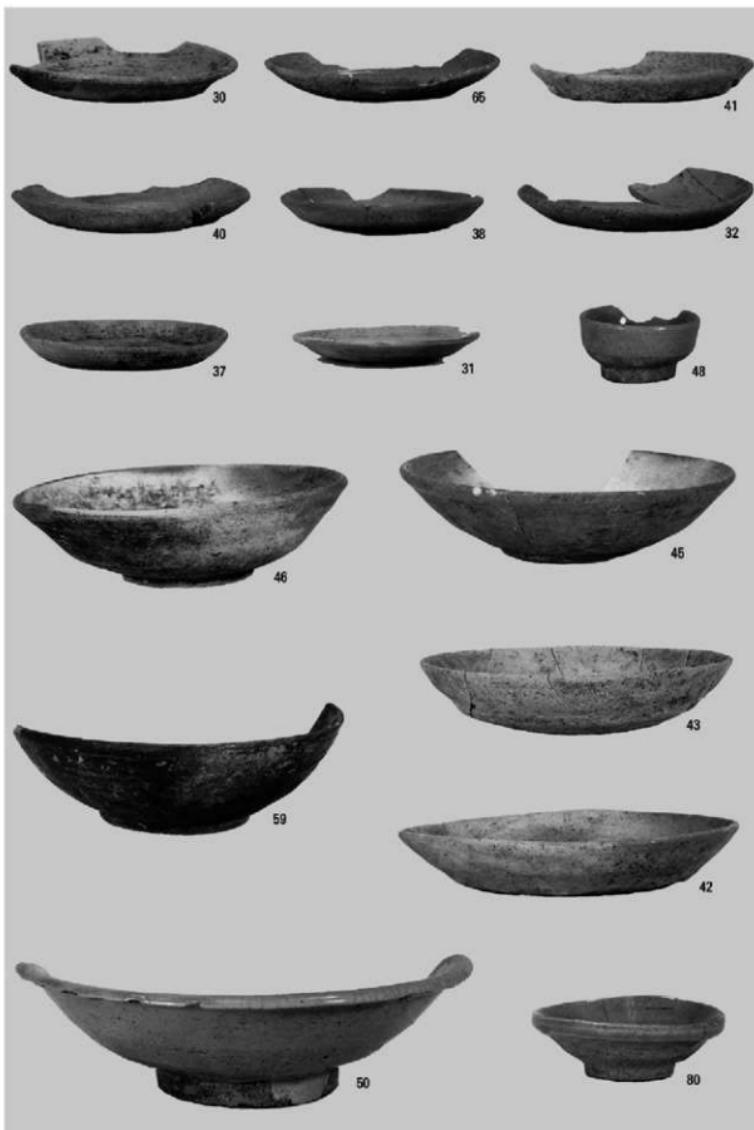


Fig. 122 出土遺物 2 (縮尺不同)

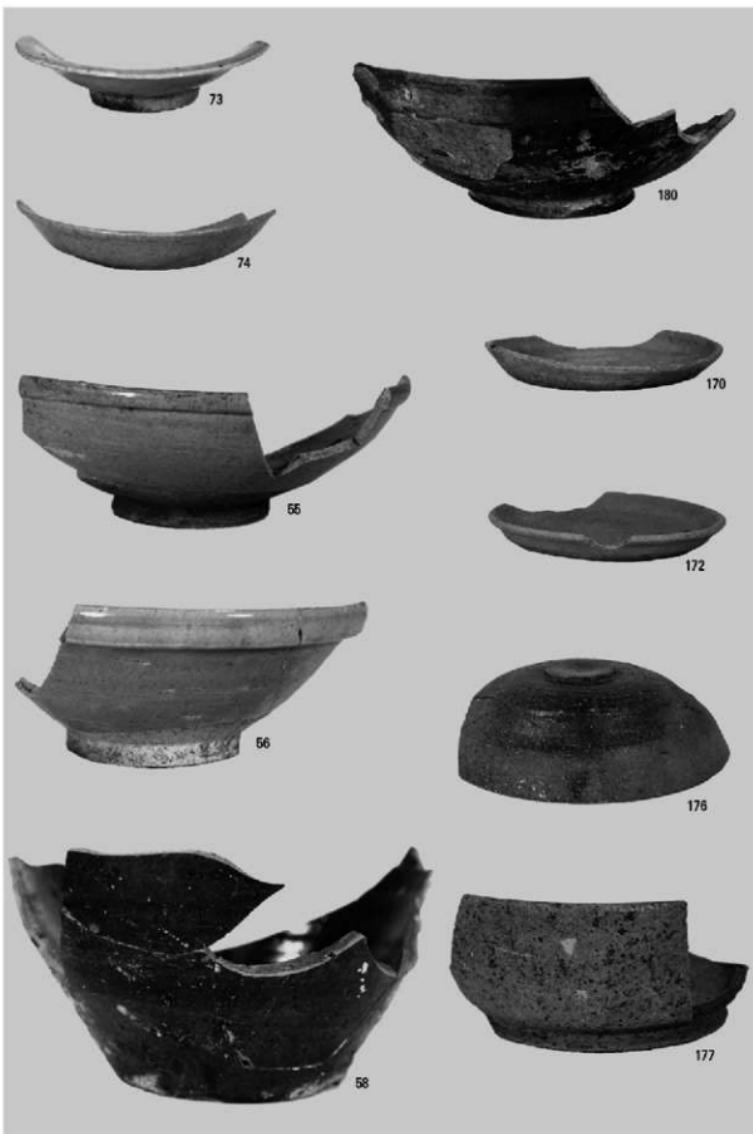


Fig. 123 出土遺物 3 (縮尺不同)

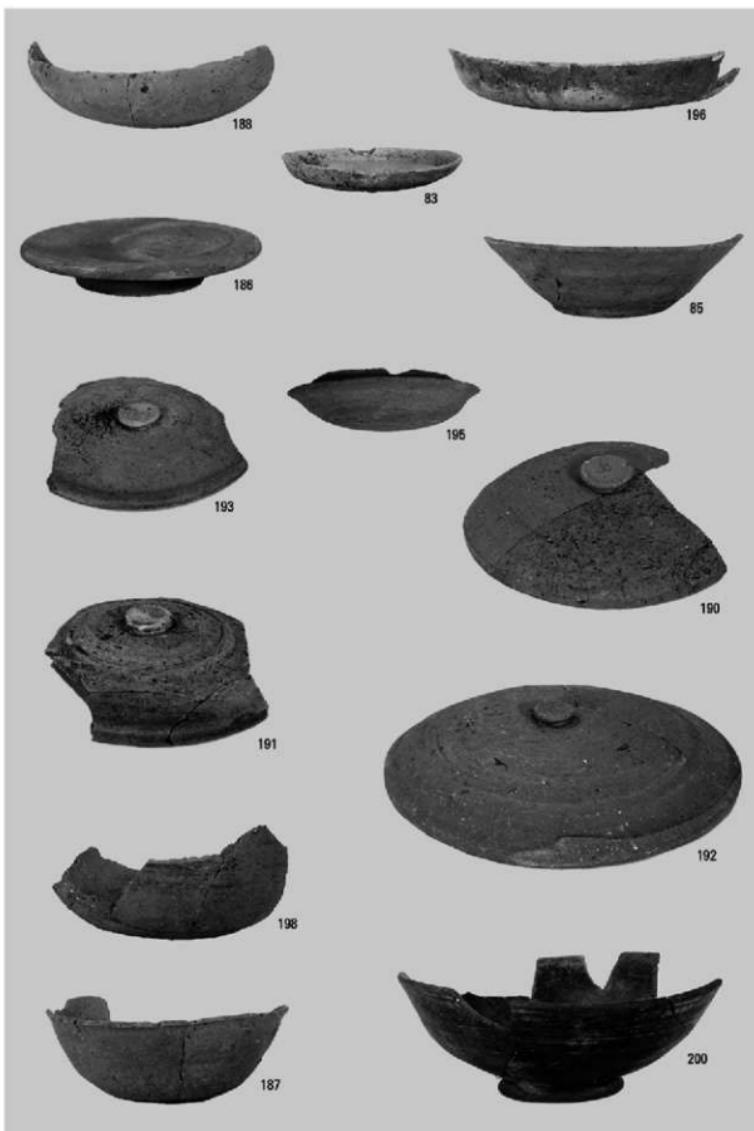


Fig. 124 出土遺物 4 (縮尺不同)



Fig. 125 出土遺物 5 (縮尺不同)

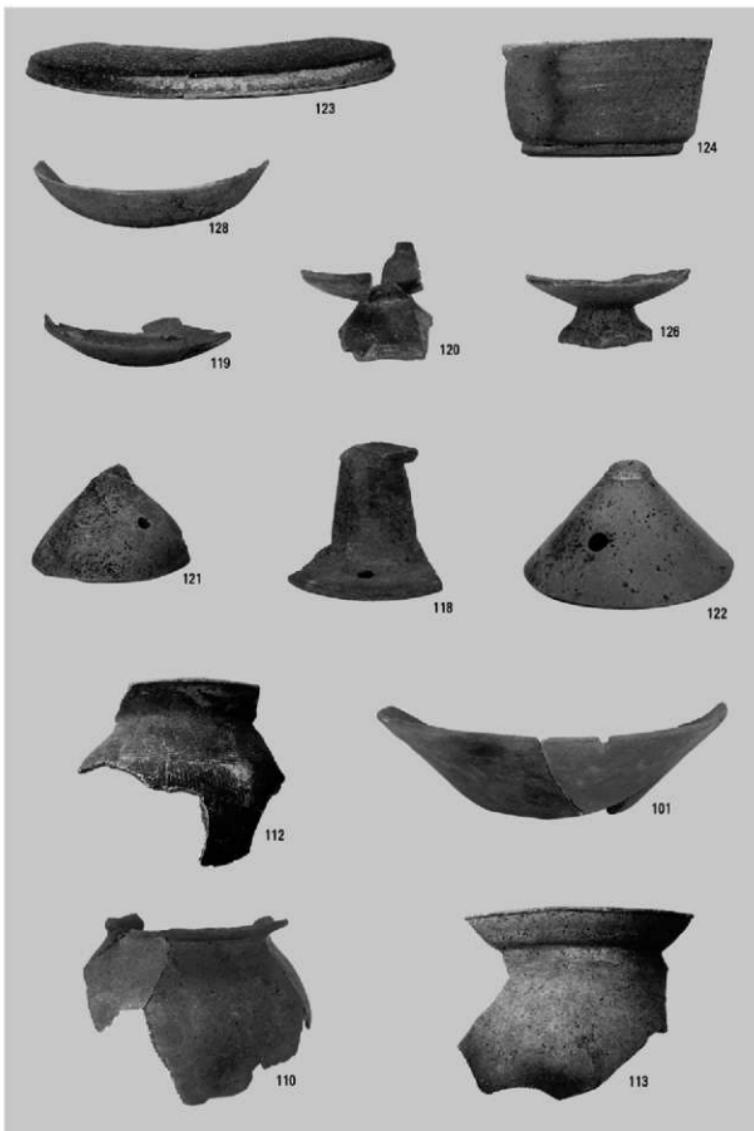


Fig. 126 出土遺物 6 (縮尺不同)

次ぎに、古代の遺構としては奈良時代の土壌を検出した。密度的には4世紀代や12~13世紀代の遺構群と較べて雲泥の差があり、きわめて稀薄である。平安時代初めから末までの間には風成砂が厚く形成される時期があり、この間には集落域が営まれなかったものと考えられる。

更に、12世紀~13世紀代（第1面~3面）は濃密な分布状況を示す。遺構は土壌や井戸、柱穴、溝などがあり、土壌と柱穴がその主体を占める。柱穴はほとんどが素掘りで、礫石に円錐や角錐を敷いたものは数える程で建物跡としてはまとまらなかった。一方、土壌はプラン的に見て円形と方~長方形のものに大別される。第2面では、境内から人骨が検出された土壌墓がある。長方形プランの土壌の中にはこの土壌墓と良く類似し、状況的にみて明らかに墓域を想起させるものもある。このことから該期の墓域が拡がっていた可能性も十分にある。また、この時期の井戸や土壌の中には機能の終焉に際して土器皿等を大量に廃棄した土器溜まりが隨所に見られるのが一般的である。しかし、本調査区ではそれがまったく検出されなかった。北隣の第50次調査でも検出されており、古墳時代後期の遺構の拡がりと考え合わせると興味深い現象と云えよう。

最後に、第II層から1枚の「和銅開跡」が出土した。福岡市内では9例目の出土である。今報告されている皇朝十二錢31点のうちで「和銅開跡」は博多遺跡群からしか出土していない。ここにこの時代に占める博多遺跡群の重要性が隠されているようである。

No	遺跡名	出土遺構	資料名	時代	初跡年	調査№	報告書№	備考
1	博多築港線 2次		和銅開跡	奈良	708	8331	184	
2	博多築港線 2次		和銅開跡	奈良	708	8331	184	
3	博多3次		和銅開跡	奈良	708	8608	未刊	別府大学調査
4	博多37次		和銅開跡	奈良	708	8740	244	
5	博多58次		和銅開跡	奈良	708	8957	328	
6	博多80次		和銅□□	奈良	708	9309	448	
7	博多126次		和銅開跡	奈良	708	200030	847	
8	博多126次		和銅開跡	奈良	708	200030	847	
9	博多156次	第2層	和銅開跡	奈良	708	200551	945	
10	海の中道 3次		万年通寶	奈良	760	7940	87	福岡市博物館所蔵
11	博多107次		万年通寶	奈良	760	9778	706	
12	博多79次		神功通寶	奈良	765	9259	447	
13	博多祇園町工区		隆平永寶	平安	796	7833	193	
14	博多65次		隆平永寶	平安	796	9017	329	
15	博多118次		隆平永寶	平安	796	9927	666	
16	三宅寺		富寿神寶	平安	818	7703	50	
17	今宿 3次		富寿神寶	平安	818	8826	738	
18	博多56次		（富壽）神寶	平安	818	8943	326	
19	海の中道 4次		承和昌寶	平安	835	9067	1043	
20	博多70次		長年大寶	平安	848	9062	370	
21	海の中道 3次		貞觀通寶	平安	870	7940	87	
22	海の中道 3次		延喜通寶	平安	907	7940	87	
23	海の中道 3次		延喜通寶	平安	907	7940	87	
24	海の中道 3次		延喜通寶	平安	907	7940	87	
25	博多39次		延喜通寶	平安	907	8806	229	
26	博多39次		延喜通寶	平安	907	8806	229	
27	海の中道 4次		延喜通寶	平安	907	9067	1043	
28	海の中道 4次		延喜通寶？	平安	907	9067	1043	
29	博多147次	3区掠乱塙	延喜通寶	平安	907	200425	892	
30	博多築港線 4次		卓元大寶	平安	958	8527	205	
31	博多147次		卓元大寶	平安	958	200425	892	

Tab. 4 福岡市内出土皇朝十二錢一覧

## 報告書抄録

ふりがな	はかた							
書名	博多115							
副書名	博多遺跡群第156次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第945集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° * *	東經 ° * *	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
博多遺跡群 第156次	福岡市博多区 祇園町2丁目	40130	0121	33°35'32"	130°24'49"	20051122 ～ 20060228	296	店舗付 共同住 宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
博多遺跡群 第156次	集落 墳墓	弥生～中世		住居跡 土 墓 井戸跡 土壙墓		土器 陶磁器 鉄製品 銅製品 石製品 土製品 銅 錢	和銅開坑	

## 博 多 115

——博多遺跡群第156次調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第945集

2007年(平成19年)3月30日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 松古堂印刷